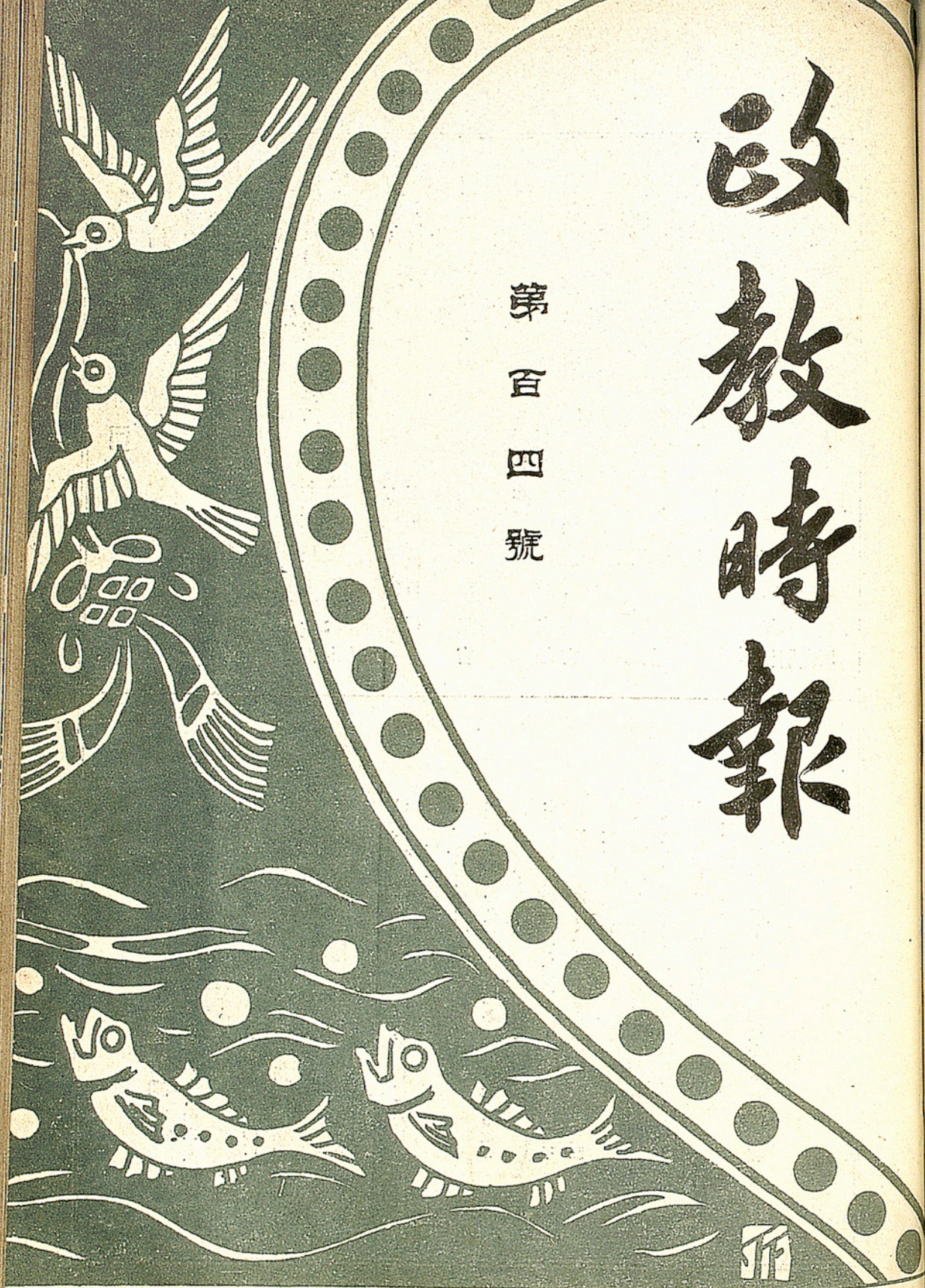


# 政教時報

第百四號



可認物便郵局三第省信選日六廿月二十年一十三治明  
(行發日八同一月每) 行發日八月九年六十三治明

政教時報第百四號目次

論 說

◎無名の求法傳道者

(社 說)

▲道懷憐愍

◎予の觀たる社會主義

池山榮吉

▲悼藤井君

◎龍樹菩薩烏陀那王に與ふる書

文學博士 松本文三郎

◎比丘の自殺

文學士 常盤 大定

◎信するとは力也

文學士 近角 常觀

▲無窮堂獨語

◎獨逸労働組合の發達

文學士 眞岡 湛海

◎村上博士の原理論に於ける形式を評す

池山榮吉

◎日米新聞の日本財政觀

本多 文雄

◎飄零の記

青柳 廣雲

◎檜扇

岡 零 子

◎歌(牧童、しげる、青葉の舎)

近角 旭村

◎夏十首(吟二)秋季雜詠(青紫)

和野 鼎村

◎報道一東

梅田 覺

◎五智より

山 明

◎余の信念

終焉の喜々

◎終焉の喜々

▲新刊紹介

政 教 時 報

第 百 四 號  
九 月 八 日 發 行

無名の求法傳道者

(五臺山の佛陀波利と普陀落山の慧夢)

大聖釋尊の教、一たび淵源を印度に發してより、東漸して支那に流れ、我國に入り、混濛浩汗所謂佛法の大海なる者益々廣くして、彌々深きを極むるに至りぬ。吾人私かに其傳來の跡を追ひ、其發達の脈を尋ねるに、一佛の名字も大悟海中の波瀾たらざるはなく、一句の呪文も遺弟心血の餘瀝たらざるはなし。況んや求法傳道者が或は葱嶺を踰へ、流沙を涉り、或は鱈魚の難に遇ひ、風伯の怒に觸れ、其嘗め來りし苦心慘憺たるに至りては、千載の下誰か毛髮爲めに悚然たらざるものやある。吾人往々經を取りて容易に看る、實に前賢に對して不忠の最も甚しきもの、古人の規箴洵に心に銘すべき也。而して吾人の最も尊敬を拂ひ、感謝を捧ぐべきは、後世史乘に於て徵すべからざる無名の求法傳道者也とす。羅什、玄奘、

大日本佛教徒同盟會綱領

- 一、佛教本來の面目を發揮して、各自の信念を確立し、國民の道徳を涵養し品性を陶冶する事。
- 二、佛教の本旨に基きて人道の大義を唱導し、精神的結合によりて國民の一致を鞏固にし國家の隆盛を企圖する事。
- 三、佛教護持の責任を全ふし健全なる宗教界を形作る事。
- 四、各宗僧侶を奨励し、其學徳を高めしめ、又從來の惡弊を改善せしむる事。
- 五、公認教制度を調査する事。
- 六、社団問題を講究して、慈善事業を起し社會の改善を企圖する事。
- 七、佛教の精神に基ける諸種の教育特に普通教育女子教育を奨励して、善良なる家庭を形作りしめ又社交を融和せしむる事。
- 八、積極的方針を取り、實業道徳を鼓舞する事。
- 九、教會の組織及儀式をして時勢に順應せしむる事。
- 十、社會に於ける一切の迷信を勸絶する事。
- 十一、殖民傳道を奨励する事。
- 十二、佛教の光輝を發揚し、其感化を普く世界に光發せしむる事を期する事。

兩三藏の如き、傳教弘法兩大師の如き、其功績の顯著にして其徳行の偉大なる之を知らざるものなしと雖。猶爲法熱誠の求法傳道に殉せし人にして、後世其名をすら傳へざるもの洵に少しとせず。吾人は此に其好適例として婆羅門僧佛陀波利と我國の僧慧夢の略傳を擧げて、如何に彼等の信念が激蕩にして其苦心慘憺たりしかを票示せむと欲する也。

婆羅門僧佛陀波利は、北印度罽賓國の人。唐の儀鳳元年、遠く印度より來り、支那五臺山に到り、遂に五體を地に投じ山に向て頂禮して曰く。如來滅後衆聖靈を潛む、唯大聖文殊師利のみありて、此山中に於て蒼生を汲引し、諸の菩薩に教ふ。波利恨むらくは、生れて入難に逢ひ聖容を視ず、遠く流沙を涉りて、故らに來りて敬謁す。伏して請ふ、大慈大悲、普覆して、尊儀を見せしめ玉へと、言ひ已りて悲泣雨淚し、山に向て頂禮す。禮し已りて頭を擧ぐるに、忽ち一老人の山中より出て來るを見る。遂に婆羅門の語を作し、僧に謂て曰く。法師の情、道を慕ふに在り、聖蹤を追訪して、劬勞を憚らず、遠く遺跡を尋ぬ。然るに漢地の衆生、多く罪業を作り、出家の輩亦能く戒律を犯す。唯佛頂尊勝陀羅尼のみありて、能く惡業を滅除す、未だ知らず、法師此經を將來せしや否やと。僧の曰く、貧道直に來りて禮謁す、經を將來せしやと。老人曰く、既に經を將たずして空しく來る。何の益かあらむ。縦ひ文殊を見るときも、亦何ぞ必ずしも識らむ。師西國に倒向

し、此經を取り來りて、漢土に流傳すべし、即ち是れ、遍く衆聖に奉じ、廣く群生を利し、幽明を極濟し、諸佛の恩に報ゆる也。師經を取りて此に來せば、弟子當に文殊師利菩薩の所在を示すべしと。僧、此語を聞て喜躍に勝へず、遂に悲涙を裁抑して、至心に敬禮す。頭を擧ぐるの頃に、忽ちにして老人を見ず。其僧驚愕して、倍々更に虔心し、念を繋げ誠を傾け、西國に廻還し、佛頂尊勝陀羅尼經を取り。永淳二年に至りて、西京に廻至して、具さに上の事を以て、大帝に奏聞す。大帝遂に其本を將て内に入れ、日照三藏を請し、及び司賓寺典客令杜行顛等に勅して、共に此經を譯せしめ、僧に絹三十匹を施し、其經本は禁じて内に置きて出さず。其僧悲泣して奏して曰く、貧道軀を捐て命を委ねて、遠く經を取りて來る、情望むらくは普く群生を濟ひ苦難を救拔せんことを、財寶を以て念と爲さず、名利を以て懷に關せず。請ふ經本を還して流行せむ。庶くは含靈同しく益せんことを望むと。帝遂に翻得の經を留めて、僧に梵本を還す。其僧梵本を得て、將て西明寺に向ひ、梵語を善くする漢僧順貞を訪ひ、奏して共に翻譯せんとなす。帝其請に隨ふ。僧遂に諸の大德に對して順貞と共に翻譯す、譯し訖て、僧梵本を將て、五臺山に向ひ山に入て今に於て出でずと云ふ。

是れ豈凛烈猛厲心を寒からしむる事蹟に非ずや。實に當時定覺寺の僧志靜なる者、日照三藏及び順貞に遇ひて、親しく

傳ふる所、現に佛頂尊勝陀羅尼經の序に見えたり。吾人は既に婆羅門僧佛陀波利が聖蹟を慕ひて、遠く流沙を涉りて來る、其信念と熱誠とに感服する所也。況んや一咒文を傳ふるが爲に、再び流沙を涉りて印度に到り、三たび流沙を涉りて經本を將ち來るに於てをや。此咒文は傳教、弘法、慈覺、智證の四大師の將來目錄に於て何れも明記する所。現に天台、眞言、曹洞、臨濟の諸宗に於て念誦し、支那及び日本に於て最も善く行はるる者、遠く其由來を尋ぬるに洵に此の如きものあり。殊に吾國古來より傳ふる所の法隆寺の貝葉梵文は實に此佛頂尊勝陀羅尼と般若心經也。現時、世界に於て發見されたる貝葉中最古の者なりといふ。南條博士、英國牛津にあるの日、既に此梵本を校正し、英譯を添へて出版せられたり。收めて牛津大學紀要に在り、而して日本支那に於ける、斷碣古碑に於て此咒を刻する者其數を知らず。以て如何に古今の萬靈を救濟せるかを知るべき也。

五臺山を以て文殊所居の靈山とする事、尙と華嚴經に出づ。阿僧祇品に曰く、東北方に處あり、清涼山と名く。昔より已來、諸菩薩衆、中に於て止住す。現に菩薩あり、文殊師利と名く、其眷屬菩薩衆一萬人と俱に常に其中に在りて、法を演説すと。吾人之を親しく其靈地を履みし人に聞く、巒峰峻拔、嶺として蒼穹に聳へ、遙かに之を望むに窈窕悠然而して清秀言ふべからず。之に攀づるに飄渺超忽として風高く、氣

寒しと、古來高僧逸士の之に詣づるもの良に故なしとせず。杜順、法照を始として彌陀念佛の法と關聯すること少しと爲さず。文殊師利發願經に曰く、願くは我命終らむ時、諸の障礙を除滅し、而り阿彌陀を見奉り、安樂國に往生せむと。蓋し此經は普賢行願讀と同本異譯にして、入唐の諸大師阿彌陀經及び上に擧ぐる心經及び尊勝陀羅尼と共に梵文を古來我國に傳ふる所也。殊に慈覺大師に至りては、親しく五臺山に上りて文殊の聖容を拜す事、慈覺大師の入唐求法記に出てたり。而して其尊儀は大和文殊院の聖像是也といふ。大師歸朝の後文殊樓院を建立し、五臺念佛三昧の法を修す、實に是れ我國に於ける念佛門の濫觴也。

五臺山と共に支那に於て靈山と稱するは峨眉山及び普陀落山也。殊に普陀落山は五臺と相關聯して、我國の僧慧萼の基を開きし所、世人の未だ知らざる者多し。傳に曰く、承和の初僧慧萼なる者、橘大后の命を奉じて入唐し、雁門より五臺山に上り、明師に遇ひ禪を傳ふ。齊衡年中再び入唐し、又五臺山に上り、窟頭に於て吳道子の畫く所の觀世音の靈像を得、歸航の日、船、密波を過ぐるに船動かす。乃ち積む所の諸物を海に投ず、猶動かす、其齋らす所の觀世音の尊像を出すに及び船初めて動く、乃ち飄々として之く所に任す、遂に一孤島に漂着す、山色濤聲清淨の風光也。地や恰も日本支那朝鮮の船舶の輻湊する所。慧萼以爲らく、恐くは大士此地に止り

て海上有緣の群生を濟度し玉ふの聖意ならむと、乃ち尊像を此島に安置し、自ら慮して之を恭敬し、遂に身を此に終れり。而して香花今に絶へざる者、實に是れ南海普陀落山の靈蹟也といふ。事本朝高僧傳に出てたり。尊像は今猶石に刻して同島に在り、模して我國陸前松島無相窟の畔に建てられたる者即是也。吾人は此傳を繙きて、吾人の先祖が如何に、求法傳道の爲めに全身を捧げしかを見て、覺へず肅然として身を戦かしむるものあり。彼か求法の歸途にありて遂に骨を絶海の孤島に埋む、誰か其信念の崇高清潔なるに感動せざるものあらむ。眞如親王の身を老嫗の瘴烟の間に捐つ、實に同時代の事也。義淨三藏が去人為百歸無十。後者何知前者艱、路遠碧天唯冷潔。沙河遮日力疲暈と云ふ者、洵に古今幾多の求法者の無緣慕標也。

觀音大士が彌陀慈悲の顯現なること皆人の知る所。特に現時泰西傳ふる所の法華經梵本普門品の頌に明らかに彌陀と親しき關係に持ち來たされたりといふ。而して彼文殊大士が佛陀智慧の權化として華嚴、般若の諸大乘經中に出づるが如く、亦觀音大士は佛陀慈悲の示現として大乘經典に普備なる人格也。此の如くして一切の經卷、十方の菩薩、遂に佛陀海中に朝宗して、絶對無限の靈界を莊嚴し玉ふ。嗚呼其德洪なる哉。泰西の歴史を閲するに、中世紀は是れ材料蒐集の時代也。アラウグスチンの信仰、トマス、アツキ、井リナスの神學、フラン

チスキの實行、ダンテの詩、悉く是幾百年來苦心の成産也。一たび近世の時代に入りて、是等幾多の材料の精髓を鍾め、之を人生の上に活動し來りたるもの、是れ近世の文明にあらざるや。吾人亦日本佛教史に於て、全く同様の軌道を迎れるを想起せずばならず。奈良朝及び平安朝の佛教は實に材料山の如く集められたり。聖徳、聖武の經營を初めとして、光明皇后の慈惠事業、天台眞言兩宗の起るに及び哲理高遠を盡くし、修行激厲を極む。上記の求法傳道者の苦心實に此處に集中す。而して源平の苦闘は此等の材料を人生實驗の火中に投じて、鑄冶鍛煉したるの時、遂に鎌倉時代の天地を開闢して佛教の精髓を鍾め、遂に佛陀救済の德音を宣傳したるにあらざるや。今や吾人の親しく接する慈愛の光明、清新なる信仰、皆是れ古來求法傳道者の慘憺たる經營を経て、初めて吾人の胸臆に澗かれたる者。一佛の名字、一句の咒文、吾人決して容易に看る可からざる也。

### 追懷惋惜

▲求法傳道の爲めに殉したる人名の中には、前頭物故された藤井宣正師と、近頃印度に於て病氣の爲めに逝かれたる清

○十一月四日和蘭海牙より  
色々の秋見て行くや離雁

○同十一日英國田舎より  
野も山も見透きて寒し冬木立

▲此頃眞岡兄より無窮堂獨語と題したる、信仰を披瀝せる趣味多き冊子を送りて呉られた、一讀の下躍如として兄の

人格が見える心地がする。其中に清澤、藤井兩師の死と共に立花鏡三郎、中川正信の二氏のことを書き添へるので、思ひ出した。

▲立花氏が肺病を得て伯林を出立した時の口占が如何にも心淋しかった。春雪の降りて心の寒さ哉と云ふのであつた、シガポールから來た葉書に「愈疲勞を重ね此地までまゐり候一日も早く日本へ着したし」とあつた、是より四五日後日本に近づき種ヶ島が見える所て死なれた。何たる悲惨ぞ。

▲昨秋一夜中川氏が轉宅後來訪されて色々の事を話して歸られたが、今から思へば當時氏は苦悶中であつたに違ひない同氏の過去を知るものは涙なしには居られぬ。(旭村)

私はかねて藤井君の名聲を聞いて居りましたが、内地では遂に一度も相會ふの因縁がございませんでしたが、先年はこちらも歐洲で御目に懸ることが出来まして、斜ならず喜んだ次第でありました。が、今から思ひますれば當時の喜びは即今日の悲みの種子であつたので、同君と私とは所謂好縁薄しとでもいふのでせうか、私が同君と相見るの機會に遭遇致しましたのは前後僅かに二回に過ぎなかつたのであります。即一回は藤井君が伯林へ見られたとき、一回は私が倫敦へ参りましたとき、併し兩回とも凡そ一週間程づきの間といふ

ものは、毎日の様に往來致しましたので、一体外國で同國人同志と遇ひますると一種云ふべからざる友情の起るものであります。況して藤井君と私とは幾分所期の目的を同らし且つ之に就て將來とも深く語るべき必要を感じて居りましたこととすから互に胸襟を披いて宗教の經營に關する問題などを語り合つたこともありまして、一見舊知の如き感があつたので御座います。此の間、私は同君の言行を遁して聊か同君の性格に就て知ることが出来たつもりで、竊かに同君の人となりに敬服して居りましたので、私は同君より早く歸朝致しました。が、追て同君が歸朝致された曉には、一層親密なる交際を願ひたいものであると、樂んで待つて居りました甲斐もなく復た温平たる聲容に接することが出来ないうこととなりましたのは誠に遺憾の極でございます。

偕て私は右に申しました次第で同君の性格は大方斯うであらふと、私かに考へて居りましたところ今日此席に於て段々と同君と永らく交はつて居られました諸君のお話しを承りまして、益々私の所信の過らざるを確めました次第で非才私の如きものが交遊日淺きにも關はず、同君の性格の一斑を窺ひ知るを得たことに就きましては、一は自ら多少の明ありしを喜ふと同時に一は又同君の徳風顯著にして、何人に對しても昭々として隠るゝなきの致す所と思ふにつけ愈々景慕に堪えざるの感があります。

同君の性格は只今段々とお話しがありました通りいかにも人に對しては親切で、事に處しては熱心で且つ極めて忍耐のつよい、現に此度病を推して佛蹟を踏査せられた爲め死を早められた事實に徴しても知れる如く、精神一到驚而後已といふ風がありました、また人と事を共にするに當つては自から進んで手柄顔をするといふやうなことはなく、これに寧ろ膝に居て働いて功を人に譲る、即所謂人に花を持たせるといふ美質を備へて居られた様に思はれます

この崇高なる性格は即同君の過去の履歴を形作つたもので之に就てはすでに定論かあると信します、又同君が歐洲諸國及び印度諸地方を視察せられた結果として歸朝の後は定めて幾多有益なる材料を供給されることであらうとは何人も豫期して居つた所であり、その事の全く空望に歸して了ひましたのはかへすくも遺憾のことであり、私が同君の逝去に就て最も遺憾とする所、言を換へていへば私の最も同君に希望して居つた所のは學事よりも寧ろ宗教(廣くは宗教界の經營)に關する事項であつたのです

同君のやうな性格は事を就すに當り萬事に必要なるは申すまでもないこととありますが殊に今日我國に於ける宗教を處理するには一層その必要を感じる事情がありますので、若し同君をして宗教の衝に當らしめたならば一宗の内治は勿論取り分け宗の外交の上に於て例へば東西兩本願寺の關係の如き

に於ても亦大に見るべきものがあらうとは私の竊かに期待して居つた所であり、固より當法主義下は頗る聰明でゐらば恰も龍の雲を得るが如き趣きであらうと信します、私は同君の計に接しましたとき、同遊の近角君と此事を語つて共に嘆を同うしたのでその折心に浮びました感想を概畧申述べた次第であります

七月九日

白蓮社藤井君追悼會に於て

池山榮吉

巖間爲深水。愛欲爲巨浪。

煩惱爲浮沫。邪見摩竭魚。

唯有智慧船。能度斯大海。

(佛所行證)

### 予の觀たる社會主義

吉田 靜致

近頃我邦にてある一部の人が社會主義を唱道するやうですが、其説の可否は暫く措いて問はず。一体社會主義と云ふものは、之を簡單に縮めていふならば。資本家と労働者の關係より起りたるものにして、即ち資本家が労働者を目して、一の機械とし、道具と見做して彼等に分配を施さず、自ら其利益を壟斷するによりて、労働者は其應酬苛酷に堪えぬまゝ不平の聲を放つもの。是れ社會主義の由て起つた所以である。今それ我邦は果して社會主義起らざるべからざる乎、世上具眼の士が心を潜めて大に研究すべき重要問題であらうと思ふ。試みに歐洲に於ける二三の例を取りて、之を我邦の現狀に比較し來たならば参考に資し且つ興味多いことであらふ。

我邦とよく其状態の吻合して居るものは佛蘭西であらふ。御承知の如く佛國人民は至りて獨立心に乏しい、従て責任を重ずるといふことはない、乃ち何事によらず人に依りて事をなすと云ふ傾がある。例へば共和政府であれ、帝政時代であれ、何れの時の政府者を問はず、人民は毫も意に介せず、之を歓迎するの傾がある、彼歐洲を蹂躪して一世を震動したる奈翁一たび出て、帝政を呼び來れば、國民は直に足下に摺伏

して謙辭を呈するに吝でない、而して奈翁の名譽を輝かしたのは、奈翁自身の偉大であることは勿論であるが、亦國民が奈翁の下に走りて自由に其手足を動かした爲めである。併し其手足を動かしたのが敢て奈翁に限つた譯ではない、強い人であるならば誰彼を擇ばず服従するのである、即ち依頼心を起すのである、こゝが專制と共和政府たるを問はざる所以である。かやうの國柄であるからして、現今行はれて居るものは國家社會主義である、この國家社會主義といふことは國家の權力を以て個人の獨立計營にかゝる資本を引上げて打ち壊さんとするのである、國家としては多くの資本を集注せしめて個人的勢力の膨脹を好まない、如此して工業と云ひ、教育と云ひ、全然干渉主義を取りて進みつゝある。まさに之と正反對の地に立つものは英國である。國民は凡て獨立心に富み、責任を重じ、信義を守り、秩序を貴び、其性行の相異なる殆ど千里の差ありと云はねばならぬ。

人として慾望のないものがないが、其慾望や個人的であるか將た公共的であるかの二者より外ないのである。言を換へて云へば自利と利他との問題に歸するのである。之を佛國人にみるに正さしく自利の一方のみ汲々として他を顧慮するの違がない。彼等の眼には社會とか國家とか云ふ觀念は少しも保たない。然るに英國人は同じ自利心でもコレクトイゴイズム即ち集合的自利心で其自利心や國家全体若くは社會全体を

通して計る所の利益であつて、他を陥れても自ら利せんとする卑屈の心はないのである。彼等の獨立心は纏て國家の休戚を擔ふて立つ所のもので、彼等は決して干渉を潔しとしな、彼等は自策自勵所謂自治制を以て任じて居る。彼等の念頭には常に國家の觀念は離れない、社會の觀念は忘るゝことはないのである。

元來英國は殖産工業の最も發達し最も盛大を來したことは世界中に冠たるものである。かゝる殖産工業の國柄ゆゑ、資本家と労働者との間に種々なる問題が起つたけれども、それ／＼救済的方法が講ぜられ過激なる社會主義は行はれぬ。乃ち英國には社會改良者たるカーライルの如き人傑ありて資本家と労働者の調和を計り。またキングスレイの如き宗教家出で、宗教的博愛の源泉より社會の平和を持ち來した爲めである。今の社會主義唱道者を見るに多くは學問に失敗し、事業に失敗したる者にして、彼等は無智なる労働者を煽動して以て自己口腹の慾を満たさんとする野心家に過ぎざるやうである。獨立に富み、自治の念に篤き英國國民にありては、社會主義を唱ふるもの尠なき所以であらふ。

思ふに國家社會主義とは、一切の資本は社會全体のものでして、即ち共產主義を主とするのである。此共產主義は個人の勢力を殺ぐこと甚だしきを以て、英國人の如き個人の獨立に重きを置く國柄にあつては、是又社會主義の行はれざる原

因である。英國人は、個人的なると共に國家又は社會の觀念を離れぬ事は前述したるが、例へば彼等が運動遊戯法をなすに於ても、其等の精神が充塞して居る事があらはるゝ。彼等が一隊をつくつて、フットボールを行ふ時に當り、ボールが飛び來りて自分が大に名譽を博する場合あるにも拘はらず、全隊の利害を考へて、妄りに輕進するやうな事はない。此一

小技の中にも團體的精神が充分にあらはれて居る。此點に關しては佛人は純個人主義であるけれども英人は集合的個人主義とても申しましたやうか。個人主義の結果は、個人間の融和を缺き、引いて社會の秩序を紊すものである。英國は佛國に比すれば洵に世界の大國民として大に誇るに足る事と思ふのです。更に最近の著しき例を取りて見まするに、英杜戰爭の如き其最好例である。若しこれが佛國であつたならば、各殖民地に騷亂が起つたに相違ない、然るに英國の各殖民地は義勇兵を組織して本國に聲援を與へんとするの意氣込である、佛人は此義勇兵の事を聞て大に一驚を喫したやうである。以て英佛兩國の性行一般を窺ひ知る事が出来る。

今我國を以て之を觀るに果して英國國民の如き態度ありや、吾人は遺憾ながら否と答へざるを得ない。我國の獨立心に乏しきと、自治の精神に薄くして却て他の干渉を甘んずるが如き、佛國のそれに、酷似すと云ふべきである。現今我國に於て社會主義を唱ふる果して國民の將來に於て、影響する所

ないであらうか。若しも、個人の勢力を殺ぐ事あらば、競争の念こゝに止み、社會進歩の道こゝに塞がる事はないか。社會主義を唱道して労働者の爲め、世の富豪家又た資本家を攻撃するは可ならんも、只徒らに攻撃にのみ止りて、之を疏通するの道を講じなかつたなら、現在の國家は正に相反對せる二個の國民を現出する事である。國家の奇觀といふよりはむしろ國家の獨立を危うするものと云はねばならぬ。我國の宗教家たるもの社會主義に對して何等の見解を抱持して居らるゝかは知らされども、我國民をして英國流の獨立自治の精神を養はしめ、社會の高低をして平調ならしむるは、まさに是宗教家の取るべき任務ならんと信するものである。

左の一篇は吉田文學士を訪問せし際、談偶々社會主義の事に及ぶ、この篇乃ち是也。題は記者の附せし所、文字の黃亦記者にあり。若しそれ誤謬あらば記者の罪なりとす。讀者諸君焉

記者識

兩つあらいはいさかひ

やせんけふの月

(智) 月



温知

### 龍樹菩薩烏陀愆那王

### に與ふる書 (承前)

松本文三郎

### 親友書

舊一 爲禪陀迦說法要偈  
 舊二 勸發諸王要偈  
 新 勸試王頌

四十一、四禪定の力によりて、偷善く欲と覺と(新には之を欠く)歡喜と苦樂とを離るゝを得ば、梵天、光音天、遍淨天若しくは廣果天王の地に入ることを得へし。  
 四十二、善と不善との業に五種あり、執と求と忍と最勝地とより起り、中に就き唯其の善業を誦めよ。

(舊一二共に之を欠く)

四十三、一勺の鹽は忽ちに杯水を害ふ、死屍累々として流れ恆河の水は之が爲めに穢れず、小過の徳根深きものに於ける

亦復此の如し。

四十四、爾應さに知るべし、喜憂と惡作と、怠と睡と、欲及  
次疑とは、之を五過となす、是れ皆德寶を偷むの賊たり。

(舊一には之を欠く。)

四十五、信勇念定慧、之を五法と名づく、毘めよや、是れ洵  
に最勝の力徳なり。

(舊一には四十三の頌を顛倒して此に挿入す。)

四十六、爾善く之を三思せよ、自業の果來ること度を越えず  
譬へば猶ほ病老死苦の脱すべからざるが如し、如上の助言に  
よりて、以て慢心を生ずること莫れ。

(舊一には生等八苦常熾然、常持慧水灑令滅となす。)

四十七、爾洵に上天解脱を求めば須らく正見を持すべし、若  
し邪見に墮せば、假令ひ善業を修すとも、惡報必らず至る。  
四十八、爾應さに知るべし、正道を喜ばざるものは、無常無  
我不淨を知らず、念處を觀せず、四邪見の惑に墮す。

四十九、我は色にあらすといはば、爾心に思惟すべし、我色を  
棄けず、我色に住せず、色我に住せずと、爾應さに悟るべし、  
餘の四蘊亦復此の如くに空なりと。

五十、五蘊は欲(カ)より起らず、(新舊共に之を欠く)時よ  
り生せず、將九自然(ブラクリ、チ)よりも、本性(スヴァブハ  
ラヴァート)よりも、自在天よりも來らず、而も亦無因にし  
て成らず、應さに知るべし是れ無明と愛とより起れるものた

ることを。

五十一、爾應さに知るべし、戒執と心見と疑とは、是れ成佛  
道を障くる三鎖なることを。

五十二、成道は洵に爾が一身の事、他と伴たることを須るす  
但懃戒定を學して、四諦を体究すべし。

五十三、爾益最勝律、最勝慧、最勝定を修せよ、百五十一戒  
も亦唯此三に攝歸して餘あることなし。

五十四、嗚呼大王、修伽陀は誨へ玉へり、身不淨は是れ爾か  
念すべき唯一の途なりと、爾勇猛心を以て之を觀せよ、若し  
念厚からざれば、万法此に壞すべければなり。

五十五、人生の無常は、泡沫の風に逢ふて忽ちに消ゆるより  
も甚し、而も苦患の我に來るは、呼吸睡覺の如く、代謝して  
姑くも止むことなし、是れ豈に驚くべからずや。

五十六、人死すれば身或は消し、(註、之を火すれば消す)或  
は燥き、或は化し、或は不淨無我となりて滅壞雜散したる、  
爾應さに知るべし、体は元と是れ無常なることを。

(舊一には皮肉臭爛甚可惡、青瘀膿膿血流、虫蛆啖食  
至枯竭、髮毛爪齒各分散の句あり、)

五十七、大地須彌滄海も之を焚くこと七日せば、一團の火焰  
となりて消散し去り、極微も亦之を見るを得ず、況んや復危  
脆の軀をや。

五十八、總へて是れ無常、無我、孤獨(アナート)へ、註、保護

政 者なし)にして、救助なく、住宅なし、嗚呼人界の主よ、爾  
應さに生死界裡此無價の芭蕉樹に於て、不安の念を抱くべし。

(舊一には後半欠く、)

五十九、畜身を脱して人身を得るの難きは、海龜の木孔を覓  
むるよりも難なり、爾人界の力によりて妙法を修し、其の效  
果を收むべし。

六十、生を人界に受け、尙ほ且つ罪を犯すあらば、是れ黄金  
以て之を造り、珠玉以て之を飾り、之に盛るに汚穢を以てす  
るよりも尙ほ愚なり。

六十一、邦家治平、民其の堵に安んじ、聖賢之を扶翼し、我  
亦善く之を導き、(舊一二正見心成就若しくは全意義の字を以  
て之に代ゆ)加ふるに宿世の善業を以てす、此四大輪、今皆  
爾か有に屬す。

(註は此四大輪以て聖道を走るべしといふ、新には第一輪  
欠き第三輪を以て及發三於正願となす、)

六十二、牟尼は嘗て説き玉へり、徳友に頼るものは能く慈悲  
の生を全くすべしと、爾乃ち尊者に頼れ、耆那に頼らば、爾  
必ず應さに涅槃圓滿の境に達すべし。

六十三、邪見に墮すると、生を畜生餓鬼若しくは地獄に受く  
ると、耆那の未だ其の法を宣説せざるの時と、異邦蠻野の地  
と、癡愚と。

(舊一には之を欠く、)

六十四、長壽天の間に生れたると、之を不利の事となす、  
爾若し之を離れ、生幸ひに其の時を得ば、努力以て生死の苦  
を避くべし。

(舊一には之を欠く、)

六十五、嗚呼尊者輪廻は情愛死病老等一切苦患の基つくとこ  
ろ、爾應さに之を悲むべし、我今其の惡の一端を説かん。

(舊一には生死長夜苦、無量種々苦の二句を以て之を譯す。)

六十六、父子と舅姑と友怨とは尙ほ且つ展轉定期なし、何ん  
る況んや輪廻の際をや。

六十七、乳を飲むこと四海の水より多きも、凡夫は生死海裡  
に沈淪して、尙ほ嬰りとせず。

(舊一には尙ほ愛別愛悲計其涙、亦非江河所能匹の  
句を補へり。)

六十九、假令ひ因陀羅天にありて諸天の歸敬を受くるも、其  
の業力によりては、再び人界に墮すべく、轉輪王の位を紹ぐ  
も、生々死々の際、又奴婢と化すべし。

七十、身天女を擁し、永く勸樂を盡くすも、一たひ地獄に墮  
しては、或は磨かれ、或は截られ、或は裂かれ、無限の苦を  
受く。

七十二、須彌山巔は足の踏むに隨ひて昇沈す、(舊二には昇降隨所念となす)永く此に住して、勸樂を享くるも、忽ちにして無限の苦患代はり來り、熱灰炎泥土上に彷徨すへし。七十二、樂園に徬徨し、天女と遊戯するも、忽ちにしては樹葉劍の如き森林に墮して、手足耳鼻の觸るゝところ、皆截られん。

七十三、マンガダーキニー(曼陀)の池は、艶たる天女之に浴し、美なる黃蓮之に生ず、ヴァイタラニー(沸灰)の河は、苦鹹の水、洋々之に溢る、爾例令ひ彼に浴するも、忽ちにしては又此に入らざるへからず。

(マンガダーキニーは輕流の義、ヴァイタラニーは地獄に存する河名。)

七十四、假令ひ又欲界、色界乃至梵天所住の無色界にありて最大歡樂を得たるも、阿鼻止火裡の薪となりて、不斷の苦を受くへし。

七十五、假令ひ又日月となりて、爾か身光能く地極を照らすに足るも、爾再び黒黯點の地に來り、爾か手を伸はずも亦竟に之を看取するに由なし。

(舊一には之を欠く。)

七十六、爾如上に死せざるべからざるを以ての故に、爾應さに三徳の燈を持して、爾に光明を興へしむべし、爾孤獨に此無限の暗黒裡に入らば、日月亦照らすに處なし。

を聞くも、呼吸の存する間、之を恐るゝを知らず、彼洵に金剛性を有す。

八十四、而も地獄の圖を見、之を聴き、之を記し、之を讀み、之を想ふものは、必らずや恐懼の念を生し、之によりて以て無邊の報を受く。

八十五、一切の樂中斷欲を以て最も大なりとなし、一切苦中地獄を最も堪え難しとなす。

八十六、日に三百の刀槍を以て其の身を貫くも、何んを以て地獄の苦に比せん。

八十七、地獄無限の苦は、之を受くること百拘厭にして、尙復未だ終れりとせず、罪業滅せされは、死を求めて竟に得べからず。

八十八、是故に備勇猛に精進し、身口意の三惡業生するところ、一切罪果の種子を殄滅し、極微たも之をして遺存せしめざらんことを努むべし。

八十九、次に復畜生道に於ては、殺縛、毆打、其の他萬般の痛苦あり、和合せず相哀れまず、人互ひに相食む。

九十、或は珠玉毛皮關骨若しくは血肉の爲めに、人之を殺し、或は手(足)鞭笞、之を打ち、之を蹴り、若しくは鐵鉤(之を縛し)人之を使役す。

九十一、餓鬼道亦無限の苦を受け、間歇あることなし、欲之に迫りて、飢餓、寒熱、困憊交も至る。

(舊一之を欠く、舊二には後半欠く。)

七十七、一切の有情若し罪業を犯さは、等活、黑繩、大炎熱、衆磔、叫喚、無間等の地獄に墮して、不斷の苦を受くへし。

(舊一には之を欠く、新には唯黑繩無間の二を擧ぐ。)

七十八、或は推壓して種子の如くならしめ、或は磨搯して細粉となし、或は之を斬鋸し、或は利刀の惡劍を以て截斷す。

(舊一には之を欠く。)

七十九、或は亦之に飲ましむるに鎔銅の沸湯を以てし、或は之を縛するに赤熱尖銳の鐵索を以てし。

(舊一之を欠く。)

八十、或は鐵齒の猛犬をして之を裂かしめ、罪人乃ち天を仰きて叫喚す、或は鐵嘴惡爪、利刀に似たるの鴞鳥をして之を攫へしめ。

(舊一之を欠く。)

八十一、或は萬端の杖笞、以て之を打ち、或は巨万の肉蠅若しくは血蠅をして之を襲はしめ、大惡傷を負はしむ、罪人乃ち展轉して大悲叫喚す。

(舊一には之を欠き、新には後半畧す。)

八十二、或は熱灰堆裡に投じて不斷に之を焦がしめ、或は熱鐵鑊中に擲ちて之を煮ること、宛も南瓜を煮るに似たり。

(舊新共に之を欠く。)

八十三、罪あるものは、假令ひ地獄に於ける無限不斷の痛苦

九十二、或は口少なること針孔の如く、腹の大なることは丘嶽に似たり、汚穢前に横はりて、食ふに物なく餓飢の苦を受く。

九十三、或は皮骨凌々、乾けること多羅樹瓶の如く、或は炬日夜々に燃へ、熱砂飛びて口に入らば、隨ひて食に充つ。

九十四、食に對して汚穢、膿血尙ほ且つ得ること能はず、痘其の頸に生せば、同人相打ちて其の熱癩を啖す。

(舊此兩詩を倒置す。)

九十五、餓鬼道にありては、夏時月輪亦熱く、冬時日輪亦冷なり、人樹に向はゞ、果實即ち消し、河水を瞻は河水涸る。

九十六、罪業を棄てず、其の身を御せざるものは、斯の苦を受けて間歇なし、或は五千歳、或は一万歳、業命尙ほ盡さず。

九十七、餓鬼不斷の苦楚、何を以てか此に至る、佛陀は説き玉へり、貪慳緊くことを知らざる。是れ其の因たりと。

九十八、天界所受の樂大なるも、死苦は更らに大なり、是故に尊者は無常の天界を願はす。

(舊一之を欠く。)

九十九、身色醜惡、安臥快ならず、花冠率に凋落、塵垢衣裳を汚し、汗汗亦身に發す。

(舊一之を欠く。)

百、之を天界五死の相となす、諸天均しく之を見る、猶ほ天界有情の死相に於けるが如し。



(舊一之を欠く。)

百一、天の淨業此に盡くれば、其の業果に従ひて、復畜生  
餓鬼若しくは地獄に墮す。

百二、阿修羅は其の性固と諸天の盛容を憎む、乃ち心苦亦多  
し、無始以來の無明の爲めに、知ありといへとも遂に眞を見  
す。

百三、生死海裡、假令ひ生れて天人、地獄、畜生、餓鬼とな  
るも、皆是れ悪なり、爾乃ち知るへし、生は是れ万端苦集の  
集まるるところたること。

百四、火燄飛んで爾か毛髮、爾か衣裳を燃さは、爾應さに消  
防に努むへし、爾専心欲を殄滅せよ、是れ急中の急。

百五、人戒定慧を修して涅槃寂靜圓滿無垢の境に入る、是れ  
衰老死に従はず、地水火風日月と相關せず。

百六、念と擇法と精進と喜と捨と定と捨と、是れは之れ七覺  
分徳の集まるるところ、能く涅槃の果を招く。

百七、慧なくんは定なし、定なくんは慧亦生ぜず、唯爾應さ  
に知るへし、此二者を修するものは、生死海を見ると手跡の  
水の如し。(註、生死海は此人によりて容易に横断せらるゝか  
故に。ウエンツェル氏は西藏語の手跡の水に相當するナツク、  
セを以て森の義なりとなせり、是れ誤れるなり。蓋しナツク  
Snagは黒の義、Senesは遣されたるもの、若しくは續けるも  
の、義、而も氏之を解する能はず、則ちナツクの語を以て同

の如くに、地よりも上らず、唯宿世罪業の報、在家(の相)  
を出離するにあり。

(舊一には之を欠く。)

百十七、我今爾の爲めに煩を避けて亦多く言はず、唯一善言  
を呈す、曰く爾か心を調伏せよと、薄伽梵は説き玉へり、心  
は是れ法の本と。

百十八、如上所説の法は、比丘尙ほ總行を難しとなす、唯善  
く其の能に従ひて之を守り、爾か生をして空しく消せしむる  
こと莫れ。

(舊一之を欠く。)

百十九、諸善皆隨喜、洵に三善業を行し、佛道に回向せば、  
積徳の餘慶。

百二十、無邊生死の際、一切人天界の瑜伽主となり、大慈衆  
生を度すること、觀自在尊者の如く、

(舊一二共に之を欠く。)

百二十一、病老愛憎を去り、生を佛國に託し、薄伽梵阿彌陀  
の如く、世界の主となりて、無量長壽を享くべし。

百二十二、爾か施戒慧、大無垢の聲譽は、諸天、天上(アン  
クタクシヤ)并びに人界に喧傳し、人間諸天の如く、又美女  
歡樂を喜はず。

百二十三、耆那の通力を得て、有情煩惱の生死懼を去り、正  
覺の位に登り、世間に超越し、名亦忘し、生死に従はず、飢

音のmasa森の誤となせしなり。)

(舊一には之を欠く。)

百八、十四不記の法は日友之を説く、爾之を思ふへからず、  
之を思へば爾か心寂靜を得ず。

百九、牟尼は説き玉へり、無明より行生し、行より識生し、  
識より名色生し、名色より(六)入生し、(六)入より觸生し、  
百十、觸より受生し、受より飢餓生し、飢餓より取生し、而  
る後有生し、有より生生す。

百十一、生一たび生せば、既に悲痛、老病、欲死懼等、衆苦  
從ひ起る、生滅せば即ち一切(苦患)此に斷絶す。

百十二、甚深緣起の法は、耆那明かに之を宣へ玉へり、若し能  
く之を解せば、佛陀の教旨亦善く之を知るを得へし。

百十三、見命、精進、念定、語業と及び思と、是れは之八聖  
道、爾安心の處を得んと欲せば、須らく之を修すへし。

百十四、生は苦患なり、而して鶴を以て之か大因となす、鶴  
を去りて佛道證す。佛道を成するの法、彼八聖道を措きて、  
又何處にか之を求めん。

(舊一之を欠く。)

百十五、是故に爾努めて四諦を明かにせんことを求むへし、  
王領に住する在家の士も、若し一度ひ之を明めば、煩惱海を  
涉りて、彼岸に達するを得。

百十六、洵に善く法を行するものは、天よりも降らず、熟果  
懼亦有ることなし。

(舊一には最後に第三十六、三十七の兩頌に入る。)

阿闍黎龍樹尊者其の友烏陀憍那王に與ふる書畢

天竺班彌達一切智天(Paṇḍita Sarvajñadēva)

大譯經僧沙彌吉祥慈(Baṇḍa Dpaṇḍiseṅga) 共譯訂正

(新には阿離野那伽曷樹那菩提薩埵薩婆羅里離法了とあり)

(大尾)

### 比丘の自殺

常盤 大定

自殺問題は輓近頗る世人の注目上り、其可否の判断に至  
りては自ら定論あるに似たれば、予は之に關して特に議する  
の勞を省くべし、予が此文を草するの主趣は、佛陀の自殺比  
丘に對する制戒を擧げて、以て世人の參考に資せんとするに  
あり、蓋し幾多の經律論中、之に關する記述は一二に限らざ  
るべきも、予は之を佛敎の最古典たる阿含經及び律部に於て  
得たり、是等の經律によりて原始敎團中に自殺比丘ありしこ  
とと、及び佛陀の自殺に關せる觀念を討ぬるも、亦頗る興味  
ある事項たるを失はざるべく、幾分の裨益なきに非るべけれ  
ばなり、敘述の順序上先づ當時の比丘が如何にしてか自殺を  
敢てせるかの事情と、及び其狀況とを叙して、後佛陀の之に  
對せる制戒に及ばん。

尊者聞低迦時に王舍城仙人山側黑石室中にあり、獨り思惟すらく、不放逸の修行によりて意解脱を受け、身證を作して、尋て復退轉し、退て復た得る事六反、我今刀を以て自殺し、第七の退轉を爲さしむる勿らん」とて、遂に自殺を遂げき(雜含第三十九)

二、尊者跋迦黎時に王舍城金師精舍にあり、疾病困苦す、尊者富隣尼瞻視供養す、跋迦黎曰く、「世尊を見んを願へども疾病困苦、氣力羸瘠して、奉詣するに由なし」富隣尼爲に世尊に至りて、哀愍を以て金師精舍に往詣せられん事を乞ふ、世尊默許し、哺時禪より覺めて跋迦黎の住房に往詣す、跋迦黎に世尊を見て牀より起たんとす、佛告く、「且つ止めよ、起つ勿れ、汝の心此病苦に堪ふべきや否や、汝が身の所患増を爲すか、損を爲すか、跋白す、「世尊我身苦痛極まる、堪忍する難し刀を求めて自殺せんと欲す、苦生を樂はず、(中略)佛曰く、「若し此身に於て貪るなく、欲すべきなからんか、是則ち終りを善くし、後世亦善からん」世尊去りて後復一比丘をして此旨を傳へしむ、答へて曰く、「色受想行識の無常なること、苦なること、變易の法にして貪るべき欲すべきものにあらざることは、決定して疑なし、然れども疾病苦痛の身に隨ふと、故のごとし、久生を樂はず」と、遂に自殺せり(雜含第四十七)

三、尊者闍陀時に那羅聚落好衣菴羅林中にあり、疾病困苦

我未度のものを度し、未脱のものを脱せしめん」と言ふ、こゝに諸比丘の身を厭患するもの房舍を出て、其刃を受けて死するもの六十人の多さに至れり、世尊十五日説戒の時に至りて、何の因縁に由りて諸比丘の數の減少せるやを阿難に問ふ、阿難委しく此因縁を白し、且つ餘法を説きて諸比丘をして、智恵を勤修し、正法を樂受し、正法に樂住せしめん事を乞ふ、世尊爲に安那般那念住を説き玉へり(雜含第二十九)

五、四分律第二、五分律第二にも跋求河邊の諸比丘の互に相自殺せる狀況を詳記するあり、雜含第二十九の事實と全く相同じ、唯鹿林梵志子の名は四分律にありては勿力伽難提比丘、五分律にありては彌隣旃陀羅とせらる、此三者は是同語の人名にして五分律の旃陀羅といへるは之を貶せるならん、又四分律には「阿那般那三昧あり、寂然快樂なり、諸の不善法生すれば、即ち能く之を滅す」とあり、五分律には「自今已後安般念、樂淨觀、樂喜觀を修すべし、觀じ已りて惡不善法を生せば、即ち能く除滅す」とあり、此に由りて之を觀れば、世尊が自殺を以て惡不善法とせられ、滅に入る方法と爲されざりしや、明白なり、猶阿那般那念住の如何なるやを知らんとせば、雜含第二十九を翻讀すべし。又四分律に曰く、「諸比丘種々の方便を以て思惟して阿那般那三昧に入り、覺め已りて自ら増上勝法を得て、果證に住するを知る、されば自殺によりて度脱を得たりと思惟するは、是實に比丘衆の淺

なり、尊者舍利弗之を聞き、尊者摩訶拘絺羅を誘ひ、共に往て之を問訊し、闍陀の答ふる所全く前の跋迦黎の世尊に白す所に異らず、舍利弗曰く、「汝努力すべし、自ら傷害する勿れ、汝若し世に在らば、我汝が爲に來往周旋すべし、汝若し乏きあらば我汝に如法の湯藥を給すべし、汝若し看病人なくんば我汝を見て必ず意に適せしむべし」と曰く、「長者の供養あり、弟子の瞻病あり、意に適せざるなし、唯我疾病堪忍すべき難し、是に於て舍利弗は六根六境六識の我にあらず、我に異らず、相在らざるを説き、摩訶拘絺羅は所依なければ動搖せず、從て無趣向、止息、隨趣往來せず、未來の出沒なく、生老病死憂悲惱苦なく、是の如くして純大苦聚滅するを説く、されど闍陀は「今や我事了れり、苦活を樂はず」とて、遂に刀を以て自殺せり(同卷)

四、一時佛金剛聚落跋求摩河側の林中にあり、諸比丘の爲に不淨觀を説き、大に其功德を讚歎す、諸比丘不淨觀を修し已りて極めて身を厭患し、或は刀を以て自殺し、或は毒藥を服し、或は繩もて自ら絞り、巖に投じ、或は餘の比丘をして殺さしむ、一比丘あり、鹿林梵志子の所に至りて、「汝能く我を殺さば、衣鉢爾に屬せん」といふ、梵志子即ち之を殺し、一旦後悔の念に苦みしも、後惡邪見を起し、自己の非行を以て、却りて大に福德を作せりと爲し、手に利刀を執りて、衆比丘の房舍、禪房、經行處を循りて「持戒有徳の沙門よ、

見にして、度脱は却りて現法に得べかりしものたりしなり。以上は是當時の比丘の自殺の事情と狀況なり、即ち事情には(一)退轉を欲せず、(二)病苦に堪へず、(三)不淨觀の結果厭患の感に勝る能はずの三者を出て、而して其狀況は常に同一にして或は世尊自ら、或は他の高弟の之を慰め且つ止めたるを見る、是蓋し終りを善くして、如法ならしめんとの意に過ぎざるに似たり、前の五項は年代の年後によりて、之を排列するを得ざれども、蓋し律部より之を参照する時は、不淨觀自殺は尤も早くして、こゝに制戒あり、而して病苦自殺は其後に起れる事實なるが如し、されば自殺比丘は自己の所爲の如法に非ざることを知悉し、又他の尊者は其終焉を克くせしめて、如法ならしめんと意を以て、彼を勵ましたるなり、自殺は斯の如く如法にあらずして、佛の制戒に觸れたり、是を以て比丘の一たび自殺を遂げる、や、他の尊者は皆其後世の如何なるかを憂慮し、何趣に至り、云何の生を受けしかを世尊に問へり、世尊は之に對して常に此身を捨て已りて、餘身相續せずんば、大過ありとせずと答へられたるは、是等自殺比丘は終焉如法ならざるまでにて、皆已に滅を知り、滅を得たればなり。

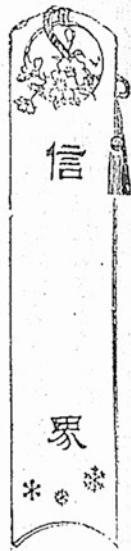
是より筆を轉じて佛の自殺に對する制戒に入らん、佛阿難より不淨觀の爲に數多の自殺者を來せるを聞き、命じて比丘僧を集め、無數の方便を以て、婆裝園中の比丘を呵

責して言はく、「汝等の所爲は非なり、威儀にあらず、沙門の法にあらず、淨行にあらず、隨順行にあらず、爲すべからざる所、云何ぞ汝等癡人、自ら共に命を斷つ」と(四分律)又曰く「汝等愚癡、其所作は法に非ず、豈我所説の慈忍にして衆生を護念せよといふを聞かざるか、今云何ぞ此法を憶はざる、(五分律)是に於てか新一戒律は制定せられたり、不殺生戒是なり、戒法制定の順序は、不邪淫戒を始めとし、之に次ぐを不偷盜戒を爲し、第三は實に此不殺生戒なりとす共に是幾多の戒律中最も重大なるもの、之を波羅夷法(Upasamādhā)といひ、之を犯すものは、團衆外に放逐せらるゝなり、即ち比丘の身に取りては死刑に處せられたるなり、但し五分律には自殺者は偷羅遮罪を得といへれ共(偷羅遮罪 Thullaco-ggāha は重過ともいふべきもの)此罪と突吉羅罪 Dukkata (惡作ともいふべし)とは、蓋し根本戒律中に含まれず、後世の制定に成れるやの疑あり、されば根本佛教に於ては故らに自手もて人命を斷ち、刀を持ちて人に與へ、死の快を歎譽して死を勸むる、皆是波羅夷罪を犯せるもの、共住を得ずとの嚴戒に觸るゝものなり、此嚴戒に關しては南北兩傳に一致せる解脱戒本に於て明白なり、南方の律に於ては唯戒本を存するのみなれども、北方所傳に於ては戒本以外に制戒の事情の詳記を傳ふるは、是甚た貴重のものにして、吾人は之に因りて原始佛教を研究する上に於て、無上の材料を有するなり、



以上の敘述によりて之を見るに、雜含及び律部に於て、吾人の得たる自殺比丘は、悉く是已に聖道に入り、所作已に辨せしものなるを以て、是等の比丘に對せる世尊の記説を以て、一般の自殺者に應用すべからざるや勿論なり、已に此位に入るものは、其生たると死たるとに於て何の損益もなきものなれば、強て生を欲すべきにあらず、爭ち死を好むべきにあらず、要するに生死に關して無關係の位置に在るものなり、されば他の自殺を幫助し、又は勸告するが如きは、不共住の重犯あるに關せず、自殺者其人は大過なしとせられ、唯終焉の如法ならずとせらるるに過ぎざるのみ、然れども生死以外に悠々たる比丘に於てすら、自殺の非法なるより推論せば、生死の間に拘々たるもの、自殺が、佛教の原理上より見て不法の罪惡たることは問はずして明白なりと云ふべし。

予が眼に入れる經律の中に於て、自殺に關せる事實は之に過ぎず、讀者は案外に結果の少きに慚焉たらざる感あらん、されども予は世尊の常人自殺觀に關しては、之が材料を有せざるを以て、之を評論するを得ず、此點に於ては讀者と共に之を遺憾とするものなり。



### 續靜觀錄

#### (二) 信ずるとは力を信ずる也

近角常觀

『信するは力也』とは先頃物故されたる清澤師が自己が實驗上より産み出された德音である、はじめは、ちよつと考へた時には頗る危険であると思ふたことも、人を信するによつてそれを易く扱ふことが出来るやうになる、前には頗る困難であると思配したことも、人を信じて行つた爲めに、それをサツサと、らくにやつてのけることが出来るやうになる、人を信じた爲めに我々は、大なる力を得るのである」とは、腸に浸み渡る味のある告白である、世に「葬がないか、どうかと疑ふて居つては足元が確かりせぬ、右へ往こうか、左へ往こうかと躊躇して居つては眞一文字に進むことが出来ぬ、思ひ切つて踏み占める時は足元が益々確かになり、一直線に進むときは岩も砕くるものである、實に世に信する程力強きものはない、人を信すれば必ず人を動かす、事を信すれば終に事

を成さしむるものである。

かく信するは力であると云ふことは確であるが、何故かく信することが出来るのであるか、全体何物を信するのであるかが明らかになりて居らねばならぬ。

信すると云へばとて盲滅法に踏み出すことではない、むやみに盲進することではない、踏み占むべき地盤が鞏固である故に自から思ひ存分足を踏み占めらるゝのである、進むべき前途に永久の光明が輝きてある故、自然と引き附けられて進まざるを得ぬのである、信するは確かに大なる力であるが、抑々其信すると云ふことは、無理に我心を固めて空を信するのではない、我々に對して大なる力の存在を信するのである、我々は佛陀の大なる力を感ずれば逆も信せずには居られぬのである、されば自然の結果として我々は之を信したるが爲めに大なる力を得るのは決して怪しむべきことではない、寧ろ當然の事柄である。

近時世人が信仰の必要なることを自覺し、且つ眞面目に之を求むる氣風の切實なるは洵に喜ばしきことであるが、唯徒らに信ぜねばならぬと云ふのみで、何を信するのであるかに氣を付けぬ傾がある、信仰と云ふことは單に苦悶して空を攫まむとしてあせることではない、確實なる佛陀の力を攫むことである、修養と云ふことは漫りに心を練たり、固ためることではない、安住すべき偉大なる佛力に信頼して、世路の

風波を凌ぎて行くことである、此の如く大なる佛の力を感ずるや否や直ちに大なる信仰を獲得し来るものである。故に信仰とは此大なる佛陀の力を見出すより外はない、故に寧ろ佛の力を攫むと云ふよりも佛の威神力に攫まるゝと云ふ方が適切である。

釋尊一代の事實は此大なる力を實現せられたるものである而してあらゆる佛菩薩も、一切の經卷も皆此大なる力の開顯に外ならぬものである。一たび華嚴を繙くときは如何に此佛陀の力が法界の大なるより微塵の小に至るまで、普く周遍してましますかを感じる次第である、法華を繙くときは如何に佛陀の力が我々を信仰の門に導くべく慈悲矜哀の御心が溢れつゝあるに感泣する外はない、文殊大士の徳を觀すれば如何にも身口意の三業清らかにして一點の垢穢を止めざる佛陀の智慧の塊を見る事が出来る、觀世音の光を仰げば佛陀慈愛の示現として身にも心にも溢るゝ甘露の徳澤は我々胸中煩惱の蝕を打消し玉ふ次第である、此の如く佛陀が人生の苦痛に感應すべく救済の人格を示現し玉ひたるものがあらゆる佛菩薩にして、其救済の力を開顯し玉ひたるものが一切の經卷である、つくづく心を潜めて佛法の大海を伺へば如何にも廣大にして殆むと其津涯が分からぬ程であるが、其一滴だも佛陀の大なる力の現はれたらざるものはない。

此の如く十方に周遍せる佛陀の力を中心に集め來り、三世

外に何物も聖人の眼中にはない、其大なる力其物と、其大なる力を傳へ玉ひたる法然聖人の徳音との間に一點の余地を存せざるに至る次第である、寧ろ法然聖人の人格夫自身を以て此大なる力の權化であると云ふ考である、夫故たといは法然聖人にすかされたてまつりて念佛して地獄に落ちたりともさらば後悔すべからず候」といふ偉大なる確信を生ずる次第である、而して是れ親鸞聖人が切りつめたる信仰の極所にして、一點の飾りなき告白である、さればこそ、法然聖人に對する確信は其儘自己の信仰の確實を顯はすこととなりて、知らず識らず、法然のおほせまことならば親鸞かまうすむね、またもてむなしかるべからずさふらふか」といふ嚴かなる言語を以て、此大なる力已外に自己なきことをあらはされた、此に於て一點自己の價値を認めぬ私なき信仰はやがて是徹頭徹尾此大なる力を以て満たされたる偉大なる信仰となるのである。



に示現せる薩埵の人格を含有せるものが即ち無量壽佛の覺體である、無量光佛の願力である、故にかく三世十方に満てる佛陀の力を一佛の上に收めて、一たび之を念するものは佛陀慈悲の胸中に攝取し玉ふと云ふのが即ち法然聖人の徳音である、我國では奈良朝平安朝に於ては佛教の材料が集まりたる時代で、此佛陀の大なる力が或は社會的に、修行的に個々別々に現はれつゝあつたのである、而して源平の戦で人生の苦痛を實驗して、初めて此大なる力の救済を味ひて、一聲稱念の中に佛教の精髓を鐘められたのが鎌倉時代の法然聖人の念佛爲本の徳音である、此徳音を聞かれたる親鸞聖人は如何に胸中に浸み渡りて喜ばれたか、殆むど想像の及ばぬ所である、歡喜胸に満ち、渴仰肝に銘すとは親鸞聖人の實感である而してかく法然聖人が宣傳し玉ひたる佛陀の大なる力を確信して、徹頭徹尾自己の運命を任せ、生殺與奪を一に佛意に委ねられ玉ひたるが即ち親鸞聖人の信心爲本の徳音である、親鸞聖人が一點の余裕の存せざる確然不動の信仰は法然聖人が大なる力を宣傳し玉ひたる響である、其大なる力を感せらるゝ程度の強さだけ夫れだけ信仰が強くなる、親鸞にをきては、たゝ念佛して彌陀にたすけられまいらずべしとよき人のおほせをかうふりて信するほかに別の仔細なきなり」とは確かに此間の消息がよくあらはれたる告白である。

臘扇日乘

吾人は一箇の靈物なり。只夫れ靈なり。故に自在なり。(意念の自在あり) 只夫れ物なり。故に不自在なり(外物を自由にする能はざるなり) 而も彼の自在と此の不自在と、共に皆絶對無限(他力)の所爲なり。共に是れ天與なり。吾人は彼の他力に信順して、以て賦與の分に安んずべきなり。

我に在るものは、我得て之を左右するを得。是れ意念を云ふなり。  
彼に在るものは、我得て之を左右する能はず。是れ名利、爵祿、死生、疾病を云ふなり。

彼に在るものに對しては、唯他力を信すべきのみ。  
我に在るものに對しては、專自力を用うべきなり。而も此自力も亦他力の賦與に出づるものなり。  
吾人は日常不如意の事あるなり。如意を得んと欲せば、分を知らざるべからず、是れ自己省察の心起る所以なり。  
自己省察の結果は、修善の心となる。  
修善の心は、他力の信心に入り、  
他力の信は報謝の心に轉じ、  
報謝の心は(讚歎名號)自信教人信の心となり、  
自信教人信は自行化他の念に入り、  
自行化他の念は、復修善等の心に反る。

故 清澤滿之

無窮堂獨語 (其二節)

◎室は僅に三疊の小室此處を無窮堂と命名した室に限りあり然れども我心限りなし我此室に入りて世界を觀するに一よりして二、二よりして三、三よりして四遂に千萬億に至りて窮りなし此心小なるが如くにして小ならず、此室若し有限なれば宇宙も有限なり此室若し無限なれば宇宙も無限なり此心若し小なれば宇宙も亦小なり此心若し大なれば宇宙も亦大なり是の如き觀をなして靜に無窮堂獨語を書いて見たのだ◎無學者が學者を嘲るは鼻が鼻を笑ふ様なものであり無信仰者が信仰家を笑ふのは鼻が鼻を笑ふ様なものであろうか自己の境界にあらざる事はそしり笑ふてはならぬ一方は豈は見へても夜は見へず他方は夜は見へても豈は見へない學問は學問で宗教ではない宗教は宗教で學問ではない此二つは一つであるか別であるか宇宙並に人生の意義目的を探り或は説明解釋する事に於て兩つながら似よつた仕事をして居る事もあるか少し冷つ違つた大なる點がある◎此違つた點といふのが各自の內的實驗に訴へてド、のつまり落ち着いた安心の境であるから冷暖自知せよといふより外はない「ゲーテ」の語に信仰は一切の智識の終點なり端緒にはあらずといふ事がありますが一の終る處が他の者の初りといへば其終りと初との間は甚近いことは分りますが一方の初めと他の初めとの間はどの位遠く離れて居るか分らないといふ事も考へられます我に安心を與ふといふ點から考へると宗教と學問との差はどの位ともいへない位であります少しの距離の差位でなく此點に於ては學問は全く無能力です全く力になりませぬ◎それであるから人は今日を喜ばねばならぬ幸福なる者は幸福なることを喜ばねばならぬ不幸なる者も亦靜かに精神上の幸福を喜ばねばならぬもがけばもがくほど段々下に陥るから靜かに無限の高さを仰ぎ見て嘆美するがよい東坡の語に曰く苦惱之極、無所三告訴、則呼父母、父母不聞、仰而呼天、天不能救、則當歸命於佛世尊、◎人は天地の靈なり天地は限るところなし人の性なんぞ異ならん」此言又味ふべき語ではなからうか心機一轉せば何の苦もなく有限の我に無限の靈覺を感ずるのである此境獨り學者の解する能はざる絶學問の妙境であらうか◎人は小體の天にして天は大體の人なりといふことありロツツエは自ら「小宇宙」といへる書を著し人は小さき宇宙なりと考へたしからば宇宙は大なる人であるか此論や、理屈に過ぐされど人天地に似たるところあり天地人に似たるところあり人が天地に似たのであるか天地が人に似たのであるか◎或人「足下は甚孔子に似て居るといへば他の人答へて「なに孔子が私に似たのじや」と若し時間といふものを考へる内に入れなかつたならば「子が親に似て居るといふも「親が子に似て居るといふも同じことであらう若し空間と云ふものを考へる内に入れず形の上に着眼せなかつたならば「人が宇宙に似たり」といふも「宇宙が人に似たり」といふも其似たる事は同じであらう似て居るところではない本来一體である◎親子似て居るのではない親子一體である天人相似て居るのではない天人一體である萬物相似て居るのではない萬物一體である◎夜來の雨で庭前の芭蕉の葉が凡て破れうるはしき花びらが一枚づつ、落ちる其音が無窮堂の寂寞を破つて何か意味ありげである昨日の有様と變つて寸裂された其葉が私に何か暗示するのであるか教訓は直ちに教へた假に世界にみてるらん火ありとも必ず過ぎて法を開かんことを要めよと

無窮堂主人



獨逸労働組合の發達 (上)

池山榮吉

◎前數回に於ては、一般に労働組合の本質、目的、利害等を論じたから、今回は、獨逸に於ける労働組合の發達及び現狀に就て御話して見やう。抑も労働組合の本家本元とも謂つべきは英國で、獨逸なども、矢張英國の例に則つたに過ぎないのであるが、國々其の特別の事情を有つて居るとであるから自然獨逸はまた獨逸風の發達をして居る。さて我國將來の労働組合は、如何なる發達を爲すべきかといへば、その英國風にもあらずまた獨逸風にもあらず、一種獨特の行路を辿るべきは勿論であるが、何方かといへば、彼れよりも寧ろ此れに類すると多きに居らん、とは我徒の竊かに豫想して居るところで、我徒が本家本元であり、また今日最も發達して居る英國の労働組合を措いて、先づ獨逸労働組合の發達を觀察せんとするは、畢竟斯う云ふ理由があるからである。

◎獨逸に於て労働組合の運動が開始されたのは、今を去ると

三十五年、即、千八百六十八年で、而も同年の九月には、僅か一と月の間に、俄然三派の労働組合の基礎が据えられた斯く一時に急轉直下の勢を以て、労働組合の運動が勃興するに至つた、其の動機を與へたのは、主として進歩黨、代議士、ドクトルマツクス、ホルシユといふ人の力で、同年の春のことであつた、彼は英國の社會關係、殊に共同組合の制度を視察する目的で、同國に赴いた、ところが、ふと、彼れ自身の言ふ所に依れば、共同組合よりもつと必要なもの、即 trade union (労働組合)の制が眼についたので、段々と取調べたその結果を『伯林國民新聞』に公にして、大に労働組合設立の急を論じた。恰もよし、丁度其の頃は、獨逸でも機械工業が漸次手工工業を壓倒して、受、與労働者間の懸隔が著しくなつて來た矢先きで、あるところへ、trade union のことは、從來餘り知られて居らなかつたので、彼の所説は忽ち世人の注目する所となつた。

▲當時獨逸の社會黨には、ラッサル派とマルクス派とあつて共に從來の經濟制の下に在ては、如何なる方法に依つても、到底労働者の地位の改善を期することは出來ないといふ説を把持して居た。が、時勢の必要上、労働組合の避くべからざる設備であるといふことは、兩派の重立ちたるもの、暗に認むる所となつた。で、ラッサル派の總理フン、シウアイツァーは、千八百六十八年八月二十三日、ハムブルに開かれた黨

の大會に於て、斷然労働組合設立の議を提出した。が、何がさてラッパルの所謂『鑛製賃法』(前號參看)を看板として居る同黨のことであるから、異議百出、討議の末、終に、労働組合は社會の現制を承認するもの、從て社會主義の根本的觀念と相容れないものであるから、黨議として其の成立を是認することは出来ない、が、フアン、シュワイツァーが個人として斡旋する分は差支ないといふ、陽に非として陰に可とするといつた様な、意味有り氣な決議が成立つた。そこでシュワイツァーは、全國に檄して、翌九月二十六日、柏林に獨逸労働者大會を招集した、ところが百十箇所の、労働者十四萬二千八人の代表者、二百有六人といふもの、が相會して、これに業務の種別に從ひ、全國を通じて組織されるべき、三十二の労働組合を包括する、『獨逸労働者同盟』の成立を議定した。

▲右の大會にはドクトルホルンシュユも列席したが、其の意見は數多の容るゝ所とならないで、激論の末、終に退場の止むなきに至つた、が、彼はこれに屈せず、翌日直ちに、彼の政友にして同じく進歩黨代議士たるフランツ、ヅンカーと共に、労働者の大議會を招集して、彼の起草に係る『獨逸労働者同盟』の設立に付ての綱領を議定し、別派の運動を開始した。

▲マルクス派の社會主義者は、九月五日ニールンベルヒに開ける『獨逸労働者第五回大會』に於て、ペーベル及びリッブクテロトの指導の下に、『萬國労働者同盟』加入の議を決し、其結

ふ一派を形作つた。ホルンシュユの設立に係る労働組合は、或は之を『進歩主義労働組合』といひ、或はその創立者の名を冠して『ホルンシュ、ヅンカー労働組合』といつて、現今に至る迄、夫の社會主義労働組合と對立して居る。而してこの兩者の主義上の差異は主として兩者の同盟罷工に對する態度に依りて明瞭である。即、前者の大に平和的なるに反し、後者は頗る戰闘的、後者の殆んど同盟罷工を目的とする組織と稱すべきに引き換へ、前者は反對者から『調和の使徒』といふ綽名を付けられた程あつて、初めより受、與労働者間の利害關係には、自から調和の道があるものであるといふ見地に立つて居る、從て労働者の地位改善は、可成平和の順序を踏んで之を爲すべく、若し争の起りたるときは、その未だ破裂せざるに先立ち、可成仲裁判斷、若くは調停官に依つて、和解の道を講ずるといふ方針を採つて居る。

◎上述の社會主義、及び進歩主義労働組合の外、基督教主義労働組合(或は舊教、或は新教、或は基督教的社會的、或は單に基督教的といふ名辭を冠する労働組合)といふのがあつて、近時追々盛んになつて行くやうであるが、これは後日別に紹介することとして、本題の下には、主に前二主義の労働組合に就て論ずることしやう。

一 進歩主義労働組合

◎社會主義労働組合か、成立以來幾多重大の變革を経て來た

果、茲に初めて労働組合の設立を是認することとなつた、といふものは、全體この萬國労働者同盟なるものは、労働組合の設立を以て、其の主たる目的の一として居るから、斯く彼れ社會主義者が、本來其の主張と矛盾する労働組合を、是認する方針を採る様になつたに就て、彼等は抑も如何なる説明を與へたといふに、『労働組合』は、労働者の地位を善くする力はないが、悪くなるのを防ぐ効はあるもので、また労働者をして、その地位を自覺せしめ、政治的問題の豫備校たるには至極適當のものである、とは、即彼等の辯解で、中にはまた『労働組合は、何等積極的利益のあるものではない、たゞ労働者をして、現在の社會制が一變せざる限りは、如何なる方法も以ても、到底其の要求を達することが出来ない、といふことを、實驗上から悟らせる効があるのみである』といつて、茶を濁したのもあつた、が、理屈は兎に角爾來彼等は、大に労働組合に關する運動に努めるととなつた。

◎斯ういふ工合で、一時に三派の労働組合が鼎立するとなつたが、或は明示的、或は默認的に、孰れも皆多少の政黨的臭味を帯びて居るとは、蓋し獨逸労働組合の特色である。中に就き、ラッパル派とマルクス派とは、前者の國民的なるに反し、後者の國際的なる點に於て、大に性質を異にして居たが、後(千八百七十五年)兩派政黨の合一するに及んで、兩派労働組合も亦從て融合して、所謂『社會主義労働組合』といふに反し、進歩主義労働組合は、其の主義、組織、目的等に關し、何等著しき更改を爲したることなく、着々當初指定の方針に從て進み、漸次其の範圍を擴張しつゝ、至極穩健なる發達をして居る。

▲労働組合(以下單に労働組合といふときは進歩主義労働組合のことを意味す)の組織の單位は、一定の同種業務の國民的(全國に亘り而も國外に及ばざる義)労働組合で、其の下には、地方組合といふものがあるが地方組合に成るだけ獨立の餘地を存するは労働組合組織の本旨である。此の外尙ほ所に依つては、當該地方共通の利益を保護する爲め、數箇の地方組合を包括する地方聯合組合といふものが出来て居て、之には主として社會教育、法律顧問(組合員の)、他の黨派に對する防衛及び客舎(主として組合員の)設定が委されてある。又或る州若くは縣には擴張聯合組合といふものがあつて、主として遊説、勸誘の任に當つて居る。各國民的労働組合は、總理事會、それから、總ての労働組合を包括する『獨逸労働者聯合組合』には、中央理事會の設けがあつて、最高機關として事務を執つて居る。労働組合の創立者たるドクトルホルンシュユは今日尙ほ中央理事會顧問の任に當り、且つ右聯合組合の機關誌『労働組合』の發行者となつて居る。

▲労働組合の目的は、定款の定むる所に依れば、『適法的手段に依り組合員の利權を保護獎勵する』に在るので、左の件々

は、例則に定めある事項中重要なるものである。一、勞賃は各種の原因に基く勞働不能に對する保險、及び必要の休養、並びに通常の教育に要する費用を併せ、勞働者及び其の眷屬の生計を維持するに足るべき額に定むべし、一、勞働時間は十時間とし、日曜及び夜間の勞働は成るべく之を廢すべし。一、女子及び幼少年勞働者に相當の保護を與ふべし。一、監獄の勞働は并をして世間の勞働と競争することなからしむべし。

▲受、與勞働者間に重要なる爭議の起りたるときは、地方組合は之を已れの所屬する勞働組合總理事に申告し、總理事は先づ自から調停を試み、其の效なきときは、其の事件を中央理事會に移送する。而して中央理事會は、一、更に自から調停を試みたるも其の効なかりしこと。二、罷工を正當と認めたること。三、罷工の見込あることといふ三條件の具はる場合に限り、罷工を命じ得べきことになつて居る。

▲勞働組合は、當初から諸種の補助金庫の制に重きを置いて之が發達に盡瘁した。病者補助金庫、葬式補助金庫の制は、各勞働組合に其の設がある。廢疾補助金庫も、千八百六十九年以來、普く勞働組合に行はれて居たが、後、國家の廢疾保險が行はるゝに及んで、遂う廢めて了つた。勞働組合はまた早くから失業勞働者の保護に着目して、千八百七十九年、ニールンベルロの聯合大會に於ては、『旅行者及び失業者に對

する聯合組合補助金庫』の定款の議定を見るに至つたが、是は遂に實行されず了つた。が、千八百八十一年、指物師勞働組合が、率先して失業者保護の制を施してから、諸他の勞働組合も相踵いて此の例に倣つたものであるから、多くは一週間七馬克半(三四七十五錢程)の割にて十三週に滿つる迄給與すと定めてある。既に千八百九十年代の前半中には、該制を實行せざる組合は一つもない様になり、之を牽連して、轉地旅行費及び眷族移住費補助の制も、亦普く實施される様になつた。最後に、特別の危急の場合に於て補助費を給する制も是れ亦一般に設けられてある。

▲勞働組合は、原則として自助の立場を撰んで居るので、多くの場合に於て、國家の補助を否認して居る。例へば、幼少年にあらざる男子勞働者の勞働時間の最高限を、法律を以て規定する如きは、職業衛生の視點よりする場合を除き、勞働組合の排斥する所である。又夫の國家的強制保險の制の如きに對しても、勞働組合は嘗て大に反對を試みたものであるが、失業勞働者保險の制を、國家の手に委せんとする説に對しては、今尚ほ極力反對しつゝある。

▲地方組合に於ては、總て書記をして勞働紹介をやらしてあるが、此の外尚ほ別に九十箇所の紹介所が、設けてある。地方組合、又は地方聯合組合は、組合員をして、組合の囑託せる法律家に就き、無償にて法律上の疑義を質さしめ、場合に

依りては、其の組合員の費用を以て、組合自ら訴訟の遂行を引受けることになつて居る(但し侮辱、離婚、相続、及び組合員相互間の爭訟事件は此の限でない)。又勞働組合は、斷えず『國民教育普及協會』其他之と同様の目的を有する團體と連絡を通じて、勤なからず國民教育の奨励に勉めて居る。(第一一號參看)。

▲左の統計に徴すれば數字の示し得べき限り略々勞働組合の發達及び現狀を窺ひ知ることが出來やう。

千八百六十九年(即、設立の翌年)	地方組合	二五八
	組合員	三〇、〇〇〇
千八百七十年	地方組合	六、〇〇〇
	組合員	一、六七三
千八百七十二年	地方組合	二七九
	組合員	一、〇〇〇
千八百七十四年	地方組合	三五七
	組合員	二二、〇〇〇

(該年度に於て俄然組合員の減少を來したるは主として、ワルデンブルク鑛夫同盟罷工の失敗と獨佛戰爭開始の影響である。)

千八百七十八年	地方組合	三六五
	組合員	一六、五〇〇
千八百八十五年	地方組合	九五三
	組合員	五二、〇〇〇
千八百九十一年	地方組合	一、三五〇
	組合員	六三、〇〇〇
千八百九十八年	地方組合	一、六七三
	組合員	八一、一五〇
千八百九十九年	地方組合	八六、七七七
	組合員	八八、二七九

(組合員の減少を來したるは不景氣の影響)

千八百九十五年乃至千八百九十七年に於て勞働組合の爲したる給付

旅行費補助	被補人	八、五八三
-------	-----	-------

補助額	三八、〇一一(馬克以)
移住費補助	
被補助額	一、六五二
補助額	三四、五八五
失業者補助	
被補助額	四、九三八
補助額	一四一、二三八
危急補助	
被補助額	一、八〇二
補助額	二七、六九二
總額	二五〇、一七六

千八百九十八年勞働組合財産有高

勞働組合金庫

一、〇六四、〇一五(馬克以)

疾病及び葬式補助金庫

一、一四〇、九二五

葬式補助金庫

五〇五、二四〇

總額

二、七二〇、一八一

千八百六十九年乃至千八百九十九年收支

收入	二七、〇〇〇、〇〇〇
支出	二四、二五〇、〇〇〇

(從て千八百九十九年度に於ける勞働組合財産有高は二百八十五萬馬克)



### 村上博士の原理論に於ける形式と評す(續)

本多 文雄

下

佛教全体の成立を解するに入出往還の形式に依り、其開發を解するに周圍循環の形式に依るの一事は、博士が大綱論及原理論に於ける主張の精髓なり。若し博士の所謂形式なる者が人をして議論を容易に解釋せしむるの一方、簡便の如き輕々しき者たらしめば、素より深く追究するを要せざるべし。是は博士の所謂「繁雜極る佛教を二様の形式を以て考へ、始めて同一思想の貫通して斷えざる者あるを認め、多年の宿疑今や豁然として瞭解するを得て自ら愉快を感ずる」(三七)底の重要事に屬し、統一論全部を組織する二個の骨子なり。と同時に、又た博士の論理を陶冶すべき二個の爐鑪なり。故に此形式の内容及相互の關係上、撞着もしくは不明の點あり。

る時は、博士畢生の大事業たる統一論全体の組織もまた撞着不明の中に埋没せらるべき運命を免れ得ざる可し。先づ問ふべきは兩形式の關係なり。

第一形式と第二形式との撞着及無關係の難。第一形式と第二形式とを對看せば、此兩者の間に於ける撞着又たは無關係の状態は直ちに會得せらるべし。第一成立的形式に依れば佛教なる者は眞理界と非眞理界とに跨れる橋梁にして、(三九)博士の所謂出入往還の關係は此橋梁を通して運ばれつゝある者なり。而も第二開發的形式に依れば、佛教は眞理の外廊を循環しつゝ、一步も眞理圏内に入る能はざる者にして、眞理界と非眞理界とは全然没交渉なり。成立的に考へたる佛教は眞理界と有交渉にして、開發的に考へたる佛教は眞理界と没交渉なるの所以は、予輩之を百方潜思するも得べからざるなり。開發は必ず成立の條件に伴ふて起る作用なりとせば、第二形式は當然第一形式と關聯して考ふべきを要す。開發の歩程は歩一步眞理界と非眞理界とを連結せる橋梁の上に運ばるべき者たらざるべからず。此橋梁以外の地に開發の歩程を考ふるに迫らざるべからず。第一形式と第二形式とは全然没交渉なりと同時に又た撞着支吾す。

博士は其所論中最も主要なるべき此兩者の關係に付ては殆んど重要視せざる者の如く、唯一時の方便たる圖解同様に取扱い、從て其關係の説明に至ても、唯一之に依て第一圖を

第二圖の如く變更して見るべきなり(四〇)と言ふの外、何等の辭をも費さざりき。然れども此兩者の關係は決して如此く輕々に付し去る可きに非るは何人も認むる處にして、少くとも第一形式と第二形式との調和的關係は根底論と大系論とを結ぶべき楔子なり、博士の所謂眞理不可説論は第二形式が第一形式に對する變更の理由とはなれど調和の理由とはならず。予輩は博士が此兩者の間に何等の調和をも言はずして、而も却て相撞着せる二個別様の形式を無雜作に提供し來りし大膽に驚かざるを得ず。

由來博士は如此き無謀なる論歩を押し進むるの人に非ず關係論、調和論は博士の思想に於て常に重要な位地を取れり。試に博士が第一編大綱論に於て緣起論實體論相互の關係を論ぜし章下を見よ。

緣起論と實體論との別は、萬有に動靜の兩面ありと假定して、各自に其一面の解釋を擔任して起る者と見ざるべからず。……既に兩方の説明を分擔せし者なるが故に彼此無關係なるが如く見ゆるも、動靜は本と一物中の兩義なるが故に、彼此無關係なる能はず。彼を説明せんとするには此に依らざるを得ず、此を説明せんとするには彼に依らざるを得ざる者多し。……此の如く動的現象界の説明を擔任する緣起論にして、靜的本體の方面に關與し又靜的本體の解釋を擔任する實體論にして動的現象の方



面に關與せざるを得ざる者は他にあらず。靜と動とは恰も水波の如く二者相反するもの、如くにして而も同一體なり。其同一體物を兩面より考察し、縦と横に解釋せんとするものは縁起と實相の二論法なり。故に二者分離せんとするも分離する能はずして、常に關係しつゝあることとは、恰も經緯の二線の相依て相離れざるが如きものあり。此の如く二論法の相依て相離れざる所に於て漸次開展せし者は其れ佛教なる乎。(三三〇—三三三)

若し博士の言辭を借らば、佛教の成立を顯す第一形式は靜的方面に屬せる實體論的性質の者にして、其開發を顯す第二形式は動的方面に屬せる縁起論的性質の者なりと謂つべし之を以て彼此相互の中に完全なる調和的狀態の儼存するを要するの所以は、博士自身の既に認むる所ならずや。而も博士は吾人をして首肯せしむるべく果して何等かの説明を取りし。當に博士が之に對して適當なる解説を取らざりしのみならず。覆ふべからざる撞着と不調和とは先づ此二形式の上には顯はる。博士も亦た苟に此撞着と不調和とを認めて、能ふべくんば之れを免れんと苦悶する者の如し。さればにや博士は次の如き巧妙なる(?)譬喩を借り來れり。

此に賊(佛教)あり人の家屋(真理の外廓)を回りて未だ其内に入らざるが如き狀態なりと謂ふべし、然れども賊の人家を回るや歩々内に入らんと欲するが如く、小大權

如し。

開發とは如何なる狀態より如何なる狀態に進むを謂ふかといへる問題に對して、博士の説く所一様ならず、或は相對より絕對に(一七八等)、或は理想より人格に、不中より中に(二〇七等)或は淺より深に、單より複に(二三八)進むの意義を以てせりと雖も、大旨の歸する處は、消極的非活動的狀態より積極的活動的狀態に入るを以て開發の意義及方針となせり(四三—四四五)。いづれにもせよ、博士立論の見地よりせば、開發とは歩一步より多し真理の屬性を領取し、其眞理的領域を擴充しつゝ行く者なりとするに非ずんば、其の意義は到底解すべからざる者と成り了らん。然らば則ち開發とは、分量的にいへば歩は一步より真理を顯現し行く事多きの謂にして、位地的にいへば歩は一步より真理の領域に近づきつゝ行くの謂なり。而も博士の周圍循環の形式に現はれたる開發なる者は、毘曇、成實、法相、三論、攝論、地論、天台、華嚴、密教、日蓮、淨土は各自に眞理界を距る同一距離の上にて、皆共に位地的に均一せられ、又々齊しく眞理の圏外に在りて眞理と没交渉なるの故を以て分量的に均一せられ、爲めに周圍循環の形式上に於ける開發なる者は、遞次級數的觀念を容るゝの地なきに至れり。於此乎開發なる語は終に無意義に了る。思想の斷つ可らざる系線上に強て起終二點を置くの難。

實顯密聖淨の諸教にして眞理の室内に進入せんと欲せざる者一としてあるとなきなり。(四一)

如此き一片の譬喩を掲げ來て、僅かに第一形式に於ける眞理非眞理有交渉的狀態と、第二形式に於ける眞理非眞理没交渉的狀態とを調和せんと擬するに至ては、博士の説明や窮せりと謂ふべし。更に奇なるは、宗教の宗教的部分は眞理界と有交渉なれども、宗教の哲學的部分は眞理界と没交渉なりと爲し、之に因て陰に前陳の撞着を糊塗せんとするに在り(五六〇)。「その哲學と相類せる説明たるや、恰も眞理を中心とし、その外廓を循環するが如き者なり(同上)」と謂ふに迫んては、愈出愈窮、遂に佛教全體の開發狀態を顯すべき周圍循環の形式は、幾かに佛教の哲學的部分に限りて適用され得る事に成り、博士が陣頭に高揚せる「佛教は宗教なり」てふ標榜は何時の間にやら撤去せらるゝに至れり。

開發なる語を無意義に終らしむるの難。原理論一部の論せんとする處は佛教の開發なり。博士が依憑し信仰する處の者は開發的佛教なり。開發なる語が博士の所論中に於て如何に重大なる位地を占めつゝあるかは今更々するを須るざる處なりとす。而も開發なる語が幾多の不明、曖昧を含みつゝあるかは予輩已に第一篇大綱論の批評に於て言へり。今復た本篇原理論に於て周圍循環の形式の上に現はれたる開發なる語は愈其意義をして不明ならしむる弊に陥りつゝある者の

佛教なる者は釋迦に依て格斷に始めて發見せられ、全く他の思想發達の歴史と無關係の狀態に於て獨立の生長を遂げ、或時期を劃して遂に世界の上より消滅し去る者なりとせば則ち止む、苟も然らざる以上は、佛教なる者は連綿として古今に亘れる思想顯現の斷つべからざる系線上の一部にして、之を前に見れば之れが前驅者たる思想顯現の歴史と離るべからざる關係を有し、之を後に察すれば之れが後伴者たる思想顯現の歴史と斷つべからざる鎖輪を有す。其始め「七河の國」の敬天民族が梨俱の讚頌を歌ひし比より、所謂印度思想なる者が人類の間に發生し、悠々たる日月を透して波羅門教的思想となり、優婆塞沙土的思想となり、六派となり、九十五種となり、毘曇となり、成實となり、法相となり、三論となり、起信論となり、法華經となり、華嚴經となり、大無量壽經となり、ヴェンヌ崇拝となり、アラナ文字となり、摩訶止觀となり、五教章となり、十住心論となり、撰集となり、教行信證となれる幾多思想の波瀾の中に於て、或特殊の系統に依て密接せられたる一團思想の經過を佛教と名けたりとせば、換言するに思想の開發史として佛教を見たりとせば、佛教が獨り釋迦の創見に出でしに非るとは言ふを俟たざるなり。博士の所謂佛教は釋迦所悟の眞理如何の問題に對する答案の引續きなりといふは、立脚の地を佛教の門内に置きたる見方にして、足一たび門外に立ちて展望するに於ては、唯千

里、無盡の長江杳然として逝くを見るのみ。源を秩父の山間に發し、皇都の東を流れて海に朝する一道の江流は、其何處の水までを荒川の水と爲し、其何處の水からを墨田川の水となさんか、荒川の水は依然墨田の水にして、墨田の水は依然荒川の水なるを思へば、前後裁斷の區別は此間に容れ難し。唯大様に此れ迄を荒川なりとなし、此れから先きを墨田川なりと定むるが如く、釋迦を以て佛教思想の源頭となし、迦陀衍尼子を以て其開展の第一程と爲すは、元より一應便宜の處置にして、嚴密なる意味に於て然かゝるに非ざるは、博士自身も認むる所なり。佛教思想開展の道程上に於て、一の起發點を置くは、唯一個の假定に過ぎずして(四四)、説明の便宜に供するの手段に外ならず。起發點を置くの理由既に然りとせば、終極點を置くの理由尙更然らざるを得ず。實を刻すれば、或は一時説明の便宜として起發點を定むるは可なりとするも、終極點を置くの一事に至ては、一時説明の便宜として、だに頗る非論理的・非歴史的論證に陥るの弊あり。況んや之を以て唯一の論證的利器と爲すに於てや。博士の所謂循環的思想開發の法則に依るも、又た博士の所謂三段開發のヘーゲルの論證法に依るも、思想の終極點を置くは全然不可能なり。要するに

イ、思想開發の道程上には劃然として起終兩點を定め難し而も博士は之を定めんと擬す、是れ實質上の困難。

し者と、未だ一週せざる者は同日の所論にあらざる相違のあることは固より辯を俟たざるなり(五七六)。然り、果して然りとせば其所謂同日の所論にあらざる相違のある一事は、如何にして循環式上に於て説明され得べきや。元より此形式を度外に置き、單に彼此の教理に就て論評せば其相違のある事を説明し得べきも、予輩の間かんと欲する所は、教理上の説明に非ずして形式上の説明なり。思想運輸の規範として定めたる此形式の上に就く時は、博士の所謂未だ一週せざる者も、已に一週し了りたる者も、詮する所同一位地に在るの困難は到底免れ得ざる處なり。他語以て之を言はば、循環形式は思想の屈曲的發展と推進的移動とを標示し其「同」より「非同」に出で、更に「合同」に進むベール論證法の趣旨をも彷彿として看取せしむるが如き特長あるにも拘らず、未だ一週せざる「同」と已に一週し了りし「合同」とを一視するの弊は断じて免れ得難き處なりとす。而して予輩の見るところを以てすれば、此特長をも有し、また此弊をも免れ得る者は螺旋形式なり。且つ循環形式に於ける「同」其者の性質として、前程を望んで移動推進すべき一の針頭を有せざるを以て、思想の開發を標示する形式としては頗る不適當なりと雖も、螺旋形式に至ては之を内に向ければ内に入るの針頭を有し、之を外に向ければ外に出るの方針に出づ。即ち一方に於て移動推進の性質を有すると同時に、また循環歸本

ル、循環 其者の性質として起終なし。而も博士は此の起終無かるべき筈の形式上に起終を置かんとす、是れ形式上の困難。

ハ、博士は一時便宜の假定として循環形式の上に起終兩點を置けり(四四)。然らば則ち單に一時便宜の假定としての範圍内に於てのみ有効たらしむべし。之れに其れ以上の威嚴、權力を付與するを得ず。而も博士が全佛教の歸趨點が遂に淨土教に在るべき事を論ずる時には、循環圈上に起終兩點ある事を基本事實として五種の論證を爲せり(五六二)。是れ滑手段。

循環歸本の難。循環は歸本を意味す。循環式上に於ける起發點と終極點とは常に一なり。思想の開發なる者若し如此くんば、開發とは退歩の意味を顯はすべき語なり。何とならば某思想が起發點を後へに見て前方に一步遠ざかりたる時は、頓て是れ先きに捨てし所の起發點を前に見て一步之れに近づきたるの時なればなり。天下豈にかゝる開發の意義あらんや。開發は飽くまで進歩的ならざる可らず。而も循環形式に依らば、勢以上の如き結論に到着せざる可からず。博士自身もまた此の論理的困難を認知して、之を辯解すらく。但し淨土教は思想の循環として、初發の起點に復歸すと云ふも、亦誤て淨土教は小乘なりと思ふべからず。第十九圖に就て之を説明するに、真理の外廓を已に一週せ

の憂を脱れて内外出入の性質をも有す。予輩は信ず、思想の開發は循環的なるよりも寧ろ螺旋的なるを。止む無くんば唯其れ螺旋形式か。以上周圍循環の形式に伴隨し來れる幾多の困難は、自ら一個の中心より導出せられし者たる事を知る。一個の中心とは何ぞや、曰く博士の真理不可説觀是れなり。博士は何故にかくも窮屈千萬なる周圍循環の形式を取りしか。蓋は佛教なる者は真理の外廓に在て移動推進する者を認めればなり。佛教の移動推進は何故に真理の外廓のみに限らるゝか、蓋は真理は不可説にして言詮の及ぶ處に非ざる者と認めればなり。かくして博士の真理不可説觀は此に周圍循環の形式を生み、周圍循環の形式は此に又た幾多の論證的困難を生みぬ。

予輩は統一論第一編大綱論の批評に於て、博士が不可説の真理を縱説横説して、之を佛教思想開發の根底を爲す事の極めて非論理的、非歴史的(敢て非真理的と謂はず)なることを論ぜり。一個の學説として真理不可説論元より可なり。但其れ佛教なる者を人心の産物として見、之を人文史的研究の對象を爲すに至ては、如此き實體論的見地に立つの不當なるや言を俟たず。微力の言、素より博士の一顧を値せざりしと雖も、予輩は夙に如此き根本的撞着の上に立てる博士の論議が、漸次其歩武を進むるに従ひて、幾多の解決し難き衝突を來すべきを豫期せり。果然、原理論一部の組織的機關たる

周圍循環の形式に伴ふ幾多の論議的困難は、予輩の豫期が  
あながち一片の空想に非ざりし事を證據立つるに似たり、非  
歎(六月二十七日記)

題しらす

我の常から思ふことは世の一元論的宗教家が充分の實踐を積んでそれから  
て證明的實感を齎らして貰たいのであつた。然るに幼稚なる人生觀に立てるの我  
は奈何にするも宇宙の本體と人心の還源と云ふ名稱の下には活きたる神を仰  
き得ない、些々たる人間の腦力を以て甲乙例した所でそれが爲めに宇宙の本體  
の方から都合よくなつて來るものではない。もし豆腐の調製なら人間の腦髓する  
通りに都合よくなつて呉れもしようけれど、否、人の人間日用の衣食品すら兎角  
跌し離脱するのが世間法であるから、並處に奈何なる熱心家も來つて我に神の子  
たれと言へばさて、なか／＼作る作らぬの問題に依りて出來る神でもあるまいと  
思ふ。もし人間の方から作つて出來る神であつたら何時かまた人間の都合にて  
理される。さやうな果敢ない神の子とはなれるものではない。

故に一切諸法は變轉して止まらずてふ佛陀の宣言に依りて我に一點の疑なく信  
することか出來る。故に諸法は誠あることなしといふ佛陀の宣言は期せずして我  
の本心を呼來るのである。故に阿彌多羅三藐三菩提を得よ汝は佛の靈子也て宣言  
が今日に活きて居るのである。

仁科徳之助

(明治三十六年八月三十一日京都の空にて草す)

日米新聞の日本財政觀

在米 青柳 廣雲

東洋の風雲暗鬱たる秋に際し、世界の視線は滿洲の蒼天に

政を發達せしめん爲め歐米思想の精髓を吸収するに勉めたり  
その國民も亦貪慾以て泰西文明の精神を獲んとして倦まざり  
き、然るに自己の財源如何を顧みることなくして爲せし結果  
今や政府は財政をして急極に陥らしめ、國民はまた貧困に  
して施すべき余地なし。

見よ地球面上に國を建つるもの多しと雖、何れの國家か自  
國民の爲めに位地と權力とに對して極望を持つるもの日本の  
それの如く甚しきものあらんや。また領土の擴張に對して豪  
欲を逞ふするもの日本の如く甚しきものあらんや。而かもそ  
の上有限なる財政を以てかゝる天謀の企圖のため國家の財政  
と國家の貧困とは遂に這般の危局に陥るか如きかくも憐むべ  
き境涯に至れると日本の如き甚しきものあらんや。日本は日  
清戰爭の結果として臺灣を得たり、而して想ひき臺灣の生産  
物よりして國庫の充満を來たすを得べしと、然るに此豫想  
は水泡に歸せり、今や日本は臺灣に自己の主權を保持するは  
實に高價なるものとなれり、第一依頼したる樟腦の收穫も歲  
入を滿たす能はず、また他の財源の發達も望むべくもあらざり、  
そは何故なれば土蕃征討の爲め一切の事業は阻碍せらるれば  
なり、日本國民は三十年間に於て世界に比類なき進歩せりと  
自訪するも、その國家は經濟上よりして不具者となれり、  
今日日本の海陸軍を見んに日本は現時我合衆國のそれに二倍  
せる十五万七千八百二十九人の常備軍を有せり、其上豫後備

注かれつゝあり。殊に滿洲及び北清に對しては我が日本と利  
害を同ふせる、當米國の新聞紙は日々其紙面の半面以上は支  
那問題に關する記事を以て埋められ、殊に日露間の關係尤も  
その大部分を占め居れり。兎に角米人の滿洲に對する觀念は  
魯國の專暴を惡くみ加之キンネフ虐殺事件以來一層魯國の殘  
惡と支那に對する專横とは米人をしてますます惡感を抱かし  
め、東亞の天地には一度干戈交ゆるとあるを豫想し居れり  
然しなから外國新聞中に於ても我財政の急局に陥りつゝあ  
るを見て極端なる冷評を試みつゝあるものあり、左に譯する  
は米國に於て尤も勢力ある而かも日本最負なるクロニクル新  
聞の記する所なり、東亞の風雲急迫せるとき外國新聞か日本  
の財政を如何に觀察すつゝあるやを報するも亦發事にあらざ  
るべし。

「横濱の特信は簡單なるが故に詳細なることを知る能はずと  
雖とも桂總理は豫算案整理に困窮せるため内閣は危急に陥れ  
りと報せり、惟ふに日本政府は歳出入をして、平等ならしむ  
ることの難事なるを知るに至れりと推測するも誤りならざる  
べし。既に既往を見るに日本か過去數年間に於て成せしと  
ころの宏大なる事業を注目せるものは、日本政府が財政上に  
於ける這般の困却に出會せしを見て敢て驚かさるべし、否な  
當然なると思ふべし、斯の如く急局に遭遇するには實に數  
の然らしむる所にして免れ能はざる所なり、政府は國家の財

軍は四十四万五千二百八十七人之れに先きの常備軍を合すれ  
ば合計更に六十三万一千十六人となるなり、而して此算死數  
の軍人は一朝事あるときに際しては直ちに此大軍を動かすこ  
とを得るなり、而して海軍力を視るに日本現時の商業界は微  
々として振はざるに係はらず、軍艦の製造費維持費等の如き  
ものを明かに計算するとなくして、無分別にも漫りに海軍擴  
張をなせり、之等確に今回財政困窮の原因の一なるべし何故  
に日本カスの如き大軍を設備することに勉むるやと云ふにそ  
は或國に攻撃せらるゝとの考ひと、また自ら進んで海陸上に  
覇權を握らんと欲したるに原因せずんばあらず、日本は過  
去數年間戰爭熱にかされ政府及び民間も其財政如何を懸查  
することなく、戰爭／＼と戰爭の用意にのみ汲々として日も  
尙足らざる状態なりき、日本政府は這般財政の困難に出會す  
るは過去の趨勢より推せば必然の結果にして、今は唯その入  
口にして一層の窮乏は將來に於て來たるべし、そのときに至  
りて日本の政治家も國家及び國民旺盛の第一義諦は、財源を  
豊富にし、隣邦と戰爭を爲さるるにあることを自覺するなる  
べし、實に財政上の困難は、他國に於ても屢々視る如く日本  
に於ても一の疑惑もなく平和の保護者たるなり」

以上の如くいかに我財政を侮蔑しつゝあるや一見諒として  
彼等の日本財政に對する觀念を窺ふことを得べし、然しなか  
ら吾人は憶ふ東亞の天地將に電光閃かんとする際、一外國新

聞の記事を左右するの愚を學ばんや、宜しく義のある所を採つて進むべし自ら自覺と抱負とを以て突進すべし、たゞ時節柄外國新聞の日本財政觀を譯して送るのみ、

當米國と雖も露國に對する感は甚た面白からず、その原因とする所はアラスカ境界線、キシチフ虐殺事件及び滿洲事件之れなり、以上の内アラスカ境界線は左程のことなきも、キシチフ事件は滿洲事件について米露兩國に於ける重大なる問題なり、ろはキシチフ虐殺事件以來露國猶太人に對して、米國猶太人は露國皇帝へ露國猶太人の保護の請願書を送らんとするあり、其間に立ちて傳達の責を盡さんとするものは米國大統領ルースベルト氏なり、氏は一二閣員の反對あるにも係はらず、決然として其請願書を露皇帝に傳達せんことを米國猶太人に告白せられたり、露は之を聞き米國は他國の内政にまで干渉するものとして甚た快とせず、之より先き露公使と大統領との間に二三回の往復あり、然れども露公使の欺瞞と云ひまた大統領は義の爲めに動く決心せし后ちなれば露公使も亦之を如何とも爲す能はず、遂に駐米露公使は本國政府よりして、大統領の米國猶太人に請願書の傳達方を快諾せざるさき何故大統領をして他國の内政に干渉せしめざるやう盡力せざりしやと、譴責の質問と此事件について米國の方針如何を本國政府に上申すべしとし、外交上の大失策てふ大目玉を以て公使の招喚となり、米國は目下密々の運動な

る露公使去りて然る後キシチフ事件について公然發表する模様なり、請願書は數多く紳士紳商の連印を爲し、而る后ち大統領に送り大統領は更めて露皇帝に致す手順なり、此請願書は今現に 桑 港 に在り數日間の后は大統領に送らるべし、露内閣に於ても該請願書を受理するや、否やに就て閣員二派に分れ大争論ありしことを新聞にて見受けたり兎に角該請願書一件について新にまた米露交渉事件起るやも知れずとの事也。

千九百〇三年七月十二日記



### 飄零の記

飄 零 子

一簣一杖都の空を通れ出て、落ち行く先は雲水の身の哀れ吾れ殘敗の余生を煙霞の間に養へばとて、青春の命よく幾時ぞ、今や凋悵として獨り迷ふ孤村の暮、思ふこれや昔金城々頭に鉄鞭を揮して、續紛たる雪の曙、同窓秀才の間に豪骨を

誇りし人、あはれるの餘勇いまいづこ、片影さへも留まらぬ哉。

ともにく轡を駢べて都門に驅りし友よ、御身多才を抱いて今や六尺床頭の上、あゝ人生の快事よく幾時ぞ、實にや、うつらふものは花のみにあらざりけりな、仇し野の露をくに際なき浮世かな、吾や御身と滿身北陸の風雪を凌いで、共に笑つて相見る都の空、彌生が岡の花紅葉漸くこれより詩趣あり、一朝吾は哲學に志して半世の途を違かへ、御身留まつて獨り詩界に盛名を馳す、思はざりき、今日またともに恨を等しうせんとは、あゝ思へば前生いかなる縁にしぞ。

この夏は吾も半ばあの世の人なりき、悲風慘憺の曙、吾や迷執の雲井の都を落ちいて、行きつくは太平洋上波の上、こゝらこの世の恨を埋めんと、房總の間に飄浪して、九十九里の長灣に慘たる月光を浴び、夜もすがら物思ひつゝ泣きぬ。

寄せては返す浪の音は無限の韻さを傳へて、理想の聲を呼ばうなり、吾はつれなき世をば波の底に遁れんと、崑頭に踞してひたすら世を呪ひぬ、月は輝き水白うして吾が影は疎なり、この時吾が耳ちかくさゝやくものあり、「皇天の使命爾にあり」と、吾は慄然として天上の聲を聞けり、吾は豁然として理想の光を認めぬ、吾崑頭大に呼んで杖をふるふ、角帽翩翩々として長く海浪に委し、鬢髮蓬として海風の來り拂ふに任か

す、仰けばみ空の月は皎として白く、澎湃たる浪の音は尙ほ余韻を脚下に響くなり、これより長く吾は迷はずなりぬ。

夫れ汨羅の涯、長沙の水、恨は綿々として長へに盡さざるなり、華巖の瀧に身を投せては六尺身中の煩惱を解くに由なかりし少年もあり、なにがし瀾の泥に半生の恨をかくせし秀才の魂も悲し、世の人は知らずあめれど、萌出づる若草の戀を抱き、青春の血を涸らせし浮世の恨に泣きて、そか百年の命を紅花一朝の露に隕せし人の数はそも幾そばくありとするや、げにまゝならぬ人の世や、いつはり多き人の世や。

あやしまるゝ哉、思ひ定めてし吾が命は尙ほこゝにあり、驚かるゝ哉、思ひ定めぬ人の命は旦暮の間を知らずと告げ越しぬ。

吾や亡き魂のうつせみのぬけの殻、うき世の波に再びたゞよひぬれど、いづれは消ゆる泡沫の哀を待つ身ぞ、十六夜の月の影山の端にたゞよへばとていづれは沈みゆく世ぞ、思へばくしきは人の心かな、きのふ死なんと泣きし身の、けふは理想の光にあこがるゝ、あすは魂いづく中有の空に迷ふらんよ、あはれ寂びしきわが心かな。

檜扇

岡 茂

星祭り

今宵は星祭る夜なり  
銀淡灰かに白く、大空に横はる。全く晴れて一抹の雲だに浮  
ばされば、天の川も渉るにいと安からめ。  
兩妹か染めたる柵機の歌結べる竹の葉に、白露の玉浮べり、  
露は星の涙か、はた妹のか。

踊り

鎮守の社の廣前に、亭々たる一本の松を繞りて、五人六人の  
若き男女、手をつらねて踊る。  
今し銀の如き上絃の月は、松が枝に懸りて、歌の聲は大鼓の  
響々と共に更けぬ。  
麥莖にてしつらへる篝火もとろくと燃えのこりて、何時し  
か笛の音も消え、獨り野薔薇の薺に虫の音高し。  
今宵彼等の夢果して何？

庭の初秋

雜然と植込みたる、殆んど自然に近き、吾か五歩の庭にも日  
頃秋の季流れ來りて、肅殺たる秋思滿つ。  
繪扇は芥子坊子の如き實となり、籬の夏菊漸く色褪せ、紫苑  
の丈け六尺に餘り、桔梗三ツ四ツ綻ひて紫既に深し。

自然の大靈は如何なるものを用ゐても其偉なる力を現はすも  
のなり。

金光

しげ

とこ闇の谿に迷へる罪の子にみ靈の光り來よ  
と召すなり  
ぬかつきて只たへへき吾等なりみ光りをと  
く何のさかしら  
み光りのあまりに高く吾才のあまりに低く只  
仰ふき見る  
罵りて再びわれに歸るとき袖にまばゆきみ光  
をあふぐ  
寂しさに弱さに仰ふぐ雲の上にみ靈のわれを  
召し給ふ聲  
願くば靈の火むらよかしこげに道とく人の胸  
やきつくせ

紫陽花

青葉の舎

新潮

牧童

夢にわび夢にもだえの二十年や運命しうねし  
蛇にかもにる  
答あげてくちなわ驅ひし童のむかし暮はし悶  
えたへねば  
惱の火いやもえさがる吾が胸にうれしくもあ  
るか秋の初風  
いつこにか新潮ながるなにかも若き生命の  
あてがれゆかむ  
とこしへに湧きて流る、新潮や若き生命の潜  
む海原  
頭あけて海原わたる新汐のつよき生命のとは  
にあらまし  
友よいざ小琴かなてよはて知らぬ旅路に急ぐ  
人しとどめん  
涙くだけ雷狂へ風すさべ我立つ岩の小搖ぎも  
せし

風わたる苑の夕暮虹消えて淡き榮を紫陽花に  
見し

あせ初むる紫陽花に笑む身ぞさびし三歳ぶり  
なる故郷にして

紫の葡萄ひと房手につみて君とわかたば吾喜  
ひ足りなん

露に照る朝の日ざしのまばゆきに珠なす葡萄  
美はしと見し

葡萄園に小狐忍び垣のやれ若き僕のつくろひ  
もせず

我影に小狐にげし野葡萄の甘きひと房まぐと  
來にけむ

晴れ渡る野路さまよへば東に虹あらはれて蜩  
のなく

幽寂に地の子誘ふと秋の神の寵兒ひぐらし音  
も妙になく

期來ぬと秋の女神のふりならず黄金の鈴かひ  
ぐらしの聲

夕そらの光明仰きてあてがれて讀たてまつる  
森の蜩

三日月の薄き光を身にうけて葡萄つむ子の唄  
みやびたり

秋季雜詠

青 城

宮城野や石碑の上を天の川  
白河や瀛車に夜明けて萩桔梗  
朝顔や曉の入谷の人通り  
禪寺に隣る閑居や白木權  
寺町の家皆貧し雞頭花  
月に酔ふて船に謠ふやローレライ  
故郷や年も豊かに瓜の味  
青栗の梢うごくや秋の風  
灯を消してなき出る虫や虫合  
自 嘲  
蛤とならんともせぬ雀かな

夏十句

吟

心太襟につめたき竹の露  
鮎鮎や洗ひ上げたる白き石  
杉の葉の蚊遣煙たし心太  
心太籠篋の水に打たせけり

百合活けしヒールの像や心太  
時より見る海水浴や夕立す  
水練や夕立雲の通りけり  
夕立や櫓に振ふはたゝ神  
評議はてし村の社や夏の月  
河骨の喉くやみ池の水馬

新刊紹介

文學博士井上哲次郎著

異軒講話集 貳編 東京博文館

本編は主として宗教、教育、倫理に関する講話を集め、また文學、美術の所論を交へ、六百餘頁の膨然たる小冊子をなす。博士またつとめたりと云ふべし、而して論旨明晰、思想該博蘊蓄の深き測り知るべからざるものあり、本論中最も異彩を放つものは宗教に関する論議なり、博士の宗教論は常に一貫して將來の宗教は理想教にあらざれば人類世界には不必要なりと見て、一意識的宗教を鼓吹するにあり、其熱心には何人も敬服せざるを得ず、博士曰く「最早人類が世界的社會に適應する大膽な宗教の見地を取らなければならぬのであり、此大膽なる宗教の見地は理想教より外ありませぬ」と其他推して知るべき也、博士、一たび宗教上の問題を論ずるや、世人の視線を注ぐ海に所以なしとせんや、今や國民の宗教を呼ぶの聲切なる時にあたり、本編のあらはる吾等の深く善ぶ所也、且つ此編何人にして一讀直に了解し易きを以て廣く一般に及す効亦著大なりと謂ふべし。(定價八十錢)

文學博士村上精專著

大乘佛說論批判 東京光融館

大乘佛說論一論第二編を著したる博士は、今また此編を刊行せらる、博士の刻苦精勵に驚かざるを得ず、本書の要旨は世の無學無智の輩が、教理と學術の區別を解せずして、大乘佛說を唱ふるものを目して排佛教の如く視敬すは是れ大なる

報道一束

無窮堂獨語 著者 眞岡湛海

本書の大要は本誌に掲げ置きしを以て、拙き筆もて評論を加ふるは吾心の許さざる所、たゞ私に願ひて修養の足らざる吾に多大の訓誡を與へたるを好謝す。

●秋風漸く動き初め、燈下稍々親しむべきの候と相成候。静臥の夏は去りて將に活動の秋に入り候。讀者諸君健在なりや。

●先頃大谷派本願寺新法主北陸巡回中なりしが、飯山以來兎角健康勝れず、近日中國邊へ轉地療養せらるゝ由に候。

●大谷派本願寺にては財政整理の手段として、先づ左の各項を廢止する事に定めたる由。

一、茶菓及煙草盆の備付を止める事。

但し止むを得ざる者はマツチを持參たるべし。

●兩三年前より故園に起臥して、靜かに其派の宗門教育に力を盡されつゝある、無窮堂主人眞岡湛海師よりこたひ無窮堂獨語と題する、師が折々の信仰の實驗を書き列ねたる、瀟洒たる小冊子を送り越されぬ、同師に接して親しく教誨を聞くの思ひこれあり候、直ちに三讀四讀卷を釋て難く候。

●本誌に掲載したる無窮堂獨語は其一節に候。若し同書を御望みの方は、郵券貳錢封入の上、伊勢四日市眞岡湛海師に宛て申込まれ候はゞ送呈する筈に候。

●北陸地方巡回中の近角學士は目下郷里に飯着中なるが、

誤解なりとて、先づ初めに歴史と教理との關係を説き、進んで歴史の方面にありて、大乘佛說を唱ふるは、教理の方面にありても、大乘佛說の成立せざるが如く想ひ、佛說の成立せざると共に佛說の信念も、破却するが如く思ふは、是れ杞人の憂なりとて本書の主眼とする所也、以下印度古代并に支那に於ける大乘佛說論の概況を述べ、更に近世日本に於ける富永、平田等の國學者と普寂、潮音等の説を述べ、更に、數年間に於ける井上、姉崎、前田三氏の説を學び、一々論評し批判し、七論七難を横無盡に破釋して遂に遺憾あることなし、而も論理整然一糸も紊れず、また大膽なる解釋を見るは偶々博士の批評眼の尋常ならざるを證すべし、強ち答むべきは、殊に印度、支那、日本に於ける大乘佛說の所論を蒐集して、考證博引よく記事の條を得たる、博士の勞大に謝すべき也、尙結論の一章は本書の主眼にして博士の最も力を注ぎたるものなるべし、本書を讀みて本問題の歸着を窺ふと共併して博士の意を諒して可也(定價並、五十錢)

文學博士前田慧雲著

大乘佛說史論 本 郷 文 明 堂

さき頃文學博士の學位を授けられし前田氏の著にして、此書即ち學位論文なりと云ふ、村上博士の大乘佛說論批判と本書と併せ讀まば頗る興味あり且つ參考となるもの多し、先づ兩書の成立點を尋ねんが、前田博士は曰く余の考證は未だ目的地に達せずして、遂に大乘教理が釋尊在世に於て既に萌芽を發し居る點まで究尋到及したる也、余は大乘佛說研究の半途に彷徨するものなりと云へり、然るに村上博士は曰く、余の諸見たるや何等の方面より之を論ずるも歴史問題としては大乗佛說なりと斷定せざるを得ず、以て兩博士の相違點、一にあるを知らべし、果して然らば村上博士は一學して目的の地に達したるも、前田博士は未だ其半途にあるものとして勝利の聲は村上博士にあるべき乎、これ抑々爭論の主題にして吾人は讀者諸君の批判に待つらむのみ、左に少しく本書の内容について紹介すれば、第一章釋尊説法の真相より説き起して終に類聚論に結びたり、其間佛教が上座大乘二部の分派又は大小二乗の區前若くは實相論の興起并に要點を詳細に論述せられ、經文を引證して其根據を明にし遺憾なく大乘佛教の教理を歴史的に考證せられたるは、斯學の蘊奥を極めたる博士にして始めて之を爲すべし、洵に近來の好著として之を世に薦めん哉(定價七十錢)

我 靈 興 著 者 仁 科 幽 豁

著者は精神主義の歸依者にして、業務の餘暇、此著あり、吾は信念の厚きを喜ぶ。

本月十日頃上京せらるべく候。  
 ◎島地黙雷師の令息清水黙爾氏は久しく印度にありて梵語  
 研究中なりしが、此度不幸二撃の冒す所となり、遂に同地に  
 於て逝去せられ候。是れ將に八月廿日  
 ◎最近の調査によれば全國の寺院住職總數は五萬三千二百  
 十九人にして、其内譯

天台宗	二千八百二十八人
眞言宗	七千四百五十九人
淨土宗	五千九百七十一人
臨濟宗	四千三百十三人
曹洞宗	一万千七百三十六人
黃檗宗	三百六十三人
眞宗	一万五千六百七十六人
日蓮宗	四千六百六十三人
時宗	三百八十七人
融通念佛宗	二百三人
法相宗	十一人
華嚴宗	十二人

なりとの事に候。  
 ◎醫學専門學校として有名なる濟生學舎は、此度大學組織  
 の認可其筋より許可せられざるまゝ、遂に廢校したる由。  
 ◎教科書事件漸く終局に近からんとして、文部省廢止の議  
 起る、これ何等かの運命に候哉。  
 ◎大菩提會の紛擾をさくも久しきものに候。此度は大菩提  
 會を解散して、日暹兩國親和の意を表せん爲め、覺王山日暹

◎日露の風雲は愈々近き候よしにて陸海軍それ／＼準備中  
 の噂も有之候。佐世保軍港には我艦隊集中せりとの事に候。  
 ◎禪門の老漢と稱せらるゝ西山禾山和尚は、此頃來りて本  
 郷麟祥院に留錫し、毎朝臨濟録を提唱せられ、時々怪氣焰を  
 吐くとの事にて評判頗る高く候。  
 ◎先月大分縣中學校に奉職せる文學士都築發太郎君より、  
 金五圓を、本會に寄せられ候、謹みて厚意を深謝致候。  
 ◎休夏中暫く講演を開かざりしが、本月第二日曜日より例  
 の求道學舎に於て開催致事に候。  
 ◎本號編輯ノ切に際し、編者突然病氣にかゝり、凡て意の  
 如くならず候。不昧裁の個處甚だ多かるべしと存候、寛恕是  
 祈候。早々  
 九月六日  
 病床にて認む

本月第二日曜(十三日)より開始す  
 但午前九時

**日曜講演**

**求道學舎**

清澤先生獎學資寄附金報告(本會取扱分)

一金拾五圓	近角常觀殿
一金五圓	石川成章殿
一金壹圓	八田三喜殿

寺を創立し、豫算を五十萬圓とし内二十五萬圓を名古屋に引  
 き受けしめ、残り二十五萬圓は全國を勸財する事に稻垣公使  
 の發議に日置副會長が熱心に運動中なるが、京都、大阪、奈  
 良に於ける各宗管長は多く賛同を表したるも、獨り京都に於  
 ける臨濟黃檗各派の管長は極力之に反對し居る由なるが、若  
 し建立の曉に至らば、彼の善光寺が天台淨土の兩寺に其屬す  
 るが如く日本佛教各宗共屬の寺院として特色を保つことを得  
 るに至るべしとの事に候。

◎本月五日發行の讀賣新聞紙上にて濠洲人民の反省を促す  
 と題する社説の中に、左の一項有之候。吾等は痛快の論文と  
 覺え候まゝ左に鈔記致し候。  
 此れを宗教の上より考察するに、世界二大宗教の一たる佛教の光明は、人類の  
 みならずして有らゆる動物の上及び、一視同仁、總ての生物に對して恩愛の  
 情周く行はれ、此間焉んぞ人種の異同によつて其恩恵を二三せんや、彼の耶穌  
 教は其恩恵の及ぶ所佛教に比すれば狭く、其博愛主義は人類に及べども、人類  
 以外の動物に及ばず、此れ耶穌教の佛教と大に異なる點!、然かも其の人類の  
 如何によつて博愛の度の厚薄の差を立てざるは其根本の原則たり、彼は羅典人  
 種に行はれ、チユートン人種に行はれん、而して彼は、尙ほ進んで之れを黑人  
 の上に行ひ、黃人の中に擴めん、此れ實に彼れ耶穌教が博愛主義を平等  
 に世界人類に行はんと欲するが爲めなるのみ、彼れは如斯其教義を擴むるに於  
 て、其眼中國より人種の區別なし、此れ耶穌教の本義にして、此教を守る人類  
 の必ず實踐す可き常道たり、然るに何事ぞ、耶穌教を奉ずる英國臣民にして、  
 實に此の矛盾行爲を慨歎して止まざるなり、耶穌教書は記して曰く、人類の始  
 めはアダム、イブの二人なりと、然らば此の教義を信するの人士は、人類は皆な  
 彼等二人の後裔にして、此後裔の間に其の皮膚の黃白を争ひ、互ひに相排除す  
 るの非理なるを解せずばならず、彼等は其教義の上より人類の祖を同するを  
 信し、而して現世人類の間に、其皮膚色素の異同によつて抗爭を開かん、其  
 嗚呼何んぞ其體なるや吾人は彼等濠洲白人等が、其信仰する教義の爲めに、其  
 從來の非道より離れて、速に其眞路に戻らん事を勧告す

東北傳道

第二信

一金壹圓 太田秀穂殿

啓、出京已後永井町に至るの概況は待山兄に報じ置けり、  
 就て御覽を賜はり度し、七月一日より山形市に於ける佛教同  
 志會の催せる佛教夏期講習會に出席せり、是れ今回東北に向  
 て傳道を試みたる第一の原因にして、實に同地々方有志者の  
 懇切なる招聘は、一年間東京に止りて修養講話にのみ心を傾  
 けたりし手をして、遂に舊然地方を巡回して、平素東京に於  
 て試みたりしものを、又各地に於て試むべく決心をなさしめ  
 たりし也、講師は予一人、講題は實験の佛教、集る人は教育  
 家、新聞記者、學生等文字ある人々、何れも眞摯の態度を以  
 て心を傾けて聴く、説く者亦眞摯たらざるを得んや、五日間  
 の講話實験の源泉を汲みて清涼の天地に遊ぶ、或は談話會を  
 開きて内心を披瀝し、縣會議事堂に東西文明の特徴を論じて  
 吾人東洋人は其高尚なる理想を實現すべく、實際の點に於て  
 努力すべきことを述べ、中學に同窓の文學士河合、本多の兩  
 兄奉職す、一夜燈を剪りて懷舊談を爲す、又中學に於て中學  
 師範の學生に對して巴理公使館書記たりし安達氏と共に講話  
 を爲す、抑々此同志會なるものは堤鳳麟、角張東順兩氏が幹  
 旋する所、前者は嘗て内心の苦悶に陥られし時後者は哲學館  
 に學ばれし時何れも親交あるの人、嗚呼信仰の能く人をして  
 舊盟渝らざらしむるもの洵に不可思議なるものあり、山形の

地山青くして水清く、人情質實にして、風俗殊に敦厚也。一たび山を越へ、羽州の地に入りてより殆むど別乾坤に遊ぶの感あり、同志會幹事を初めとして會員諸氏の厚情實に拘すべきものあり、別に臨みて殊に別庭を開き、予か勞を慰め、予か神を悦ばしむ、而して予が最も感謝に堪へざることは來會の諸氏が、最も眞面目に予が信仰の實驗の叫をきき、心琴の共鳴を感せられたるの點にあり、殊に山形日報、山形新聞、兩羽日日の三新聞が詳細に講話及演説を紹介して、一般多數の讀者をして親しく予が講義を聞くが如くせしめられたるは予が多謝する所也、今回の行、仙臺に於ける東北、河北、の兩紙の如き酒田新報の如き新潟日報の如き東北日報の如き越佐新聞の如き、何れも剴切に講話を紹介せられたるは、社會が宗教に對する要求の反感なるべしと雖、何れも操觚者として能く時代精神の趣く所を看取して、社會を指導せらるる點に向ては、予輩は大に尊敬を拂はざるべからざる也、去りて尾花澤に於ける佛教各宗團の開會式に臨む、地僻にして人自ら太古の風あり、日本全國中降雪最も甚しき越後長岡を以て第一とし、羽前尾花澤之に亞ぐと云ふ、家屋の構造夏猶三冬を想はしむるものあり、捲雪樓上に宿す、一夜月色凄愴として風物荒涼たり、眞に尾花澤の名に背かず、正に是れ七月六日清澤先生の月忌に當る、乃ち筆をとりて追悼の文を草す、自ら以爲らく克く眞面目を描き得たりと、是後に遺失せしもの也、七月新庄に到りて傳道す、特に婦人會講話あり、夜亦青年の爲めに演説す、鐵路此所に於て極る、八日朝乃ち腕車を雇ひて西の方酒田港に向ふ。

道中最上川に沿ひ、鬱々たる連峰の間を過ぎて行く、危岸峭立して赤壁の如きの處、舟を曠して渡り、綠樹影冷にして夏を知らざるの處、車上老鸞を聽きて過ぐ、特に溪流潑潑として屏顔色清らかに、一條の木橋、極るの處、老杉蒼々として蕙纏ひ、苔緑なる有様、宛然圖畫の風景なり、忽にして止りて車を代ふ、小亭の主人風雅の嗜好あり、恭しく扇面を出して揮毫を請ふ、いつも頗る厄介に感ずる予も此時こそは頗る興に乗して、草忙の間、東坡が溪聲山色の詩を録して去る、終日此の如くして晩、酒田淨福寺に着す、主人菊池秀言師を初め、各宗有志、弘道會員諸氏非常に待ち設けられれば、大に喜び迎へらる、直ちに議事堂に臨む、町中の有力者教育家、實業家、青年堂に滿つ、聽く人の眞面目なるに感化せられ、覺へず全幅の精神を披瀝す、翌九日午前淨福寺に於て、弘道會女子部及び眞宗婦人會員の爲めに信仰實驗談を爲す、同日夜亦議事堂に於て泰西國情につきて演説す、雨繁さにも拘はらず、聽衆前日に劣らず、十日海荒る、乃ち滞在し菊池師に就きて師が嘗て清國に遊びし時、五臺山に上りたる實況を聽く、予頗る感じ、文字を並ぶ、志の之く所也との口實の下に敢て詩と稱するも嗚呼の至り也、されど菊池師の實話の記事として示さむか。

上人飛錫上五臺。神足呵雲攀崔嵬。孤峯頂上霧初散。天空一碧月徘徊。乾隆天子帝德峻。親見尊儀破雲來。利劍斬空絕諸戲。猛獅一吼震萬雷。清話歷歷如面見。佛足頂禮呼慶哉。

酒田に於て予をして最も感ぜしめたるものは、本間家の公共

の爲めに資を下して、貧恤を事とする點にあり、是れ同家が祖先の遺訓として固く守る所也、海岸小丘上の松林は市の爲めに海風を防ぐべく樹へし所、丘陵の神社に上る、新道路は勞働者に仕事を與へむが爲に經營せし所也といふ、而して近時亦此神社に山門を建築しつゝあり、是亦善根的土木也、其他同家の家憲家風頗る感すべき事多し、三年間饑饉を支へ得べき粗米を地下米廩に貯へつゝあるに至りては、吾人亦何をか言はむ、若し所謂理想の社會を實現したるものありとせば同家の如きは確かに其幾分を遂行し得たりと謂つべし。

予が薨きに待山兄に送りたるの書は、酒田出立の前夜筆を採りて、酒田より荒川に至るの北海蒸氣船中屢之を繼續せむとせしが、猶風濤穩かならず、多少の船暈を感せしが爲めに之を果たさず、沿岸の危景送迎頻にして目を悦はすべきものあるにも拘らず、之を賞する氣分起らず、荒川に上陸し、築地に宿して翌十二日朝書し了りて待山兄に寄せたり、請ふ一讀當時の所懐を察し玉ふべし、同日新發田に着し、青年會の爲めに講話をなし、又茶話會に出席す、關根君在り、廣田君は校用の爲め上京せらる遺憾極りなし、同地の青年山内雄太郎氏仙臺高等學校に學ぶ、大に熱心に會の爲めに斡旋せらる。

十三日より十五日に至る三日間長岡に於ける各宗有志、青年會、婦人會等より招聘せらる、是今回予が東北巡回講話を終りて北越に渡りたる目的地なり、青年會婦人會の如き同地篤信者川佐氏の力を盡す所なり、氏の實行實に感ずべきものあり、予三日滞在前に擧ぐる諸會の講話に外に、同地の女子師範學校に於て婦徳修養に就きて講話を試み、羽賀工場に於

て工女の爲めに信仰道德談を爲し、又小學校を會場に充て、特に青年及び教育家の爲めに講演を開きたり、最後に至りて今回予を聘せられたる中心たる清澤現英氏の寺院に於て茶話會を開きて眞摯なる信仰談をなす、談益、密に入り、興益、加はりき、今再び此地に遊びて益々其感想を高めたりき、長部氏は其信仰を求むるの點に於て切實なる稀に見る所、野本氏は修養既に到れる人にして、多年天上天下唯我獨尊なる金言に對句として、地上地下皆是互尊と云へる意義を發揮し、而も深く之を潜めて、漫りに人に語らざるの人、越佐新聞社の味方氏、矢崎氏、信仰の點を尊重する稀に見る所の人、加ふるに山岸氏初め舊知多、予の信仰的趣味を感じたること山形と劣らず、以て予か足を北越に向けたるの志酬めたりと謂つべき也。

十六日十七日新潟に於て傳道す、予か今回の巡回講話に於て最も興味ある結果は、從來佛教のあまり盛ならざるの地、又あまり佛教を聞き慣れざるの人が、最も眞面目に聽講すること也、故に縣廳所在地の如き必ず多數の來會者聲を呑みて句々を味ふの風あり、仙臺、山形、酒田の如き是也、而して新潟は正に此種の最も著しきもの也、今回の有志家中の中心原信水氏は新潟の事情に最も通曉せるの人、而して氏曰く聽講者の眞面目なる、殊に新來紹介の頗る周到なる未だ嘗て



見ざる所、以て如何に社會の要求か宗教方面に向ひしかを徴するに足らむか、前日は詳かに予が持論たる日本佛教の含有的發達論を叙して、内心の自覺、社會の自覺、國民の自覺を喚起す、後日は東西文明比較論を辭じて、遂に佛教的見解を以て方今各種の問題、即ち婦人問題、社會問題、勞働問題等を解決し去る、而して後夜は櫻井榮作氏方に於て信仰の清話を聞き、前夜は阿部眼科病院に於て靈感ある道話を爲す、將に檀に上らむとす、別室一幅を懸く、就きて拜すれば何ぞ是れ有洲有縁の觀世音の靈像ならむとは。

十八日、十九日、水原無爲信寺の切なる招聘に應じて行く亦有洲有縁の觀世音の幅を掲ぐ、嗚呼予の行く所此靈像に見ゆるの何ぞ此の如く頻繁なる、午前婦人會の爲めに法話を試み、午後青年會の爲めに講演を爲す、抑々此寺は眞宗の碩徳香樹院德龍師の生れたるの寺、境内墓塋あり、着後直ちに之を展す、多年屢々夢魂の繞りし所、冥想靜觀當年を回憶して追懷に堪へざるものあり、陳ぬる所の書畫皆紀念の品たらずも感ざる同師が他に信仰を興へたる切實なる實驗談を爲す、予自ら辯じ、覺へず落涙し、聽者皆頭を擧ぐる能はず、嗚咽歎歎涙頤に交る、恐くは香樹院の靈來りて吾人をして此の如き神聖の感想を抱かしめしものあらざるなきを得むや、茶話會あり、泰西青年會の實況を述べて、吾人が實行の點に於て猛省一番せざるべからざるを述べ、聊か予が志す所を披瀝す青年會幹事已下一夕會談の時、予が志す所に向て深き同情を表し、強て予をして帳簿を作らしめ、喜捨の筆を染めらる、

加賀國松任にて

旭 村 生

八月二日回想夜を徹して之を認む、鏗然筆を投するの時東方既に白し

余の信念

其後小生は如來の天命、但しは自然の數、不關したる事より大に安慰を得て、今日の處は先づ職分に盡碎仕居候、就ては本日信仰談話會に出席仕右の事情得貴意度奉存候處、恰も末日に當り出席致候、只今其大要を述べて御判正を蒙度奉存候。

扱苦悶の結果、力量相應に佛の御用を勤むると云ふ一事に歸し候。兩三年前某師に處世の心得は、相伺候處、唯佛の御用を勤めんと云ふ、此外に何もなしとの仰せに有之候。其理には感入候へ共、退ひて實行の點に至りてハツタと差支迎ても薄弱なる自分等の出來得る處にあらざりて誠に御耻かしき次第に候へ共、我々の柄になき事として其儘相過さ申候。勿論其時の御用の意味は全く猷身的の事と相考へ居候、然るに此度の御用觀は猷身的の杯と云ふ六ヶ敷且出來たき筋には無之唯自分の出來能ふ範圍内極く卑近なる喫茶喫飯の些事より職業交際遊戯の末に至る迄暫らくも此御用の觀念を離れざる様相勤め申候。先日も保養の爲あ妙義漆名の諸山跋渉仕候此折も、從來の如き遊山の心得にてはなく飽迄御用を勤めと云考へ則ち可成面白く楽しく御用を勤ると云ふ念に住し候。勿論今生に於て御用を勤めんとする場合には、大小共に健康の必要なるは申迄も無御座、隨て健康に資せんと又靜かに考ふれば、凡う信者の一舉一動は總て佛の天命にあらずと云事なく、別言すれば行住坐臥一切御用にあらずと云事なし、乍併私共の如き薄弱散漫なるものは病的とは申ながら、やゝもすれば自暴自棄と我儘に落入易きものは、最此御用觀に住するを適切奉存候。實は此迄に御餘白を借て道友諸君に伺ひ度さも存候へ共、未熟の今日内心何となく耻かしき思ひも有之他日熟するを俟て意見申上度と存候次第に候。

此頃天人論を讀み候處、恰も側面より説明を聞くが如く、又大に明白を加ふる處も有之候様相候へ申候。余は拜姿の上萬々御同申上候先は右まで此如候。早々

梅 野 滋

五智より一筆啓上仕候  
 過日御紛失の原稿多分御手に入り候事と存候ひしが遂に行箱相解らず候由如何斗御困難と透察仕候是につけても洵に人事の測り難きを感ずること一層切なるもの有之候

五智より一筆啓上仕候  
 小生去十一日午前五時早味鹽川の端處を出て車を上野の停車場に飛ばし候曉風層に適して神氣大に爽快を覺え候不忍池畔遊の若葉の香りも今朝は殊更にすがすがし心地いたし候上野にも前田先生水谷祥雲の兩君と落合同行下越の途につき申候車中乗客殊の外込合候中に吾等に近く席を占めたる米國人の一家族年未だ若き夫妻の愛らしき幼兒二人を伴れたるが三人の下婢を隨へて輕井澤に遊學するもの有之長く本邦に住し候者と相見え日本語を中々巧みに話し居候ひしが一家團聚の有様何となく温き心地いたし候只殆んど絶間なく談話いたし雖々しき事は閉口仕候車中又印度人數人有之は過股ネパールより大學に留學生として來朝せし人々にて佐渡へ渡海の由語り居候ひき狭き一室の内米人あり印度人あり日本も中々開け來候様に感じ申候

長野縣井澤より長野にいたる途中氣當付たましく鳴りひびき候まゝ皆たゞ事ならずさ心も心ならず候ひしが果して農家の一少女刈取たる黍を肩にして線路を横らんとするまき機關車に觸れ重傷を負ひて倒れ候一種いふべからざる慘事を感に打たれ候

十三日には島地師も若せられ午後一時より國分寺の精舎に於て開會式舉行仕候遠近來り談ずるもの堂に滿ち中々盛大に候ひき

爾來引つゞき大内居士も來看せられ日々講談有之候島地師は海路相合へ向け出發前田師また歸來せられ目下黒田忽滑谷の二氏講談中に有之候

出張演説も既に二三所にて相開申候

來週よりは講師も増加いたし候事故諸生も來會多かるべくも存候

昨夜信仰談話會を開き席上故清澤先生遺徳の談多く出て申候先生は眞に大なる感化力を有せられし近來の一偉人たることよく明かに候先生逝き給ひてより先生を敬慕するの情更に切なるもの有之候

先は是にて擱筆候早々越後五智にて (七月十七日) 和 田 鼎

終焉の喜び

拜啓仕候、爾來疎遠に打過候處貴師如何被爲侍候や、降て小生儀碌々罷在候間乍他事御抛念被下度候。却説、鷺野大宣儀豫て御承知の病氣にて打臥し居り候處藥石も自然前業所感にや其効なく、本日前七時二十分死亡仕候。小生は七里の遠隔に居候得共、昨日午後危篤の電報を得てかけ付見候處、幸ひ終焉三時間前にて昨夏貴師より拜聴致せし法話の一部、始終くりかへしききかへし説きすゝめに候。大患の中にも笑々含み、細き手を合して低聲以て數圓の御念佛を勤みつゝれむるか如く、こと絶え果て申候。なかく、に患の中の喜びに有之候。想ふに大宣儀に昨夏小生をして幾々貴師談話を代聽せしめたるは、際終局に近き事を自覺し居たるやに思はれ候。もとより此自覺たる、自覺したる日に自覺したるに非ずして、過去永遠のむかしより自覺し玉ひたる御佛の自覺こそ、吾等衆生の自覺とあらはれしならむと感ぜられ、雖有尊く思はれ候まゝ、こゝに御禮勞々御見陳進仕候。

肥後 鷺山 覺明

閑文字

●無窮堂主人、洒々落落として物に拘焉たらざるの風あり。頃者、新に雅號をつくりて無休と名け、且つ解して曰く、無休とは四休の上に一体あり、一体の上は即ち無休なり、是を以て無即休の持業釋なかるべからずと頗る得色あり、持業釋付の雅號とはなかく念の入りたる者也。

主人更に一句を寄せ來る、曰く

一帯に雨をよろこぶ蛙哉  
自ら以て駄句なりといふ、然り恐くは天下一の駄句ならむ、幸に意を勞する勿れ。

●旭村先生今夏東北、北陸有縁の地を巡りて、道を傳ふる事、殆ど六旬の長きに亘る、而して法を説くこと亦まさに百有餘回なりといふ、人皆長廣舌に驚かざるはなし、其熱誠や遠く及ぶべからざる也。

●友の金澤に營を業とするものあり。共に相見んとするの情切なり。頃者路を富山に取り袞々たる立山の險山を越へて信州に入り、甲州を過ぎて遂に京に入る、來りて余が寓を叩く。予眞に空谷梵音をさく喜びありき。既に相遇ふや語るべき事なし。されど一道の靈脈は直に傳りぬ。洵にこれ不可思議にあらずや。

(劍 虹)



無盡燈

第八卷 (九月一日) 第九號

●前田兩博士の著書を評す

村上

(舟橋水哉)

●予が無佛の淨土觀

(伊藤古川)

●運命と自由

(中村諦梁)

●談話

(天台防)

●史乘餘塵

(青川)

●必要以上の宗教

(田舎子)

●訶梨跋摩論

(多田鼎)

●梵文妙法蓮華經和譯

(鸞嶽)

●定價一部拾錢 半年五十五錢 一ケ年壹圓郵税不要

(栗邱)

發行所

東京府下巢鴨村眞宗大學内

發行所

東京市麴町區飯田町五丁目卅二番地

監獄協會雜誌

第六十卷 第八號 八月廿日

論說

●英國の感化事業

久米金彌君

●所感(五月茶話會席上)

小河滋次郎君

●雜感(第四回教務講習所に於て)

同人

●高屋臺灣典獄の談

鳥取市 國司 周陽

●某典獄よりの來翰(八月五日付)

別 天 生

●實質改良の障害は無宗教にあり

東京便

統計

●明治三十六年六月末日現在全國在監人員表

●明治三十六年六月末日現在全國囚人刑名別

雜報

●東京市ヶ谷巢鴨三監獄の拘禁囚分配

(外數件)



前號要目

近角學士の清澤滿之師の信念  
の一篇は躍如として、師の高潔  
なる人格と慘憺たる實驗を描  
き出す。其他藤村操氏の遺翰十  
數通を收む。一讀悽然たり。

！ 讀 め ！

！ 讀 め ！